
Memento mori - 或は死者の為のミサ

雪風

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

M e m o r i ー 或は死者の為のミサ

【Nコード】

N 6 3 1 7 X

【作者名】

雪風

【あらすじ】

俺にとって、戦争は遠い世界の物語だった。

C. E. 70 7月。東アジア共和国日本自治区に住んでいたシン達アスカ一家は、コーディネイター迫害から逃れるために、オーブに移住した。

ナチュラル・コーディネイター平等を謳い、中立を宣言したオーブが、戦争に巻き込まれる筈がない。そう信じて――

そして、C. E. 71 6月15日は訪れる。

Introitus — 入祭唱

俺にとって、戦争は遠い世界の物語だった。

古くから遺伝性の病気に悩まされてきたアスカ家にとって、コーディネイト技術の確立はまさに福音だった。

父さんの父親——つまり、俺に取っては祖父にあたる人物は、死に物狂いでお金を工面し、己の子供にコーディネイトを施した。生まれてくる子供に自分と同じ苦しみを与えたくない。その一心で。そうして生まれたのが俺の父さんだった。

時代が第一次コーディネイターブーム真っ只中のこともあって、遺伝性の病気をなくす為にコーディネイトする人々は多く、さして珍しい話ではなかった。

コーディネイトを施してもなお、不安だった祖父は定期的に父さんを病院に通わせていたらしい。そこで出会ったのが母さんだった。母さんも父さんと同じように、遺伝性の病気の因子を排除するコーディネイトを受けていた。

似た境遇にあった二人が惹かれあい、恋に落ちるまでそう時間はかからなかった。

もちろん反対もあった。遺伝性の因子を排除するためにコーディネイトを受けた人間同士が結婚し子を成した場合、その子にどのような影響が及ぼされるか全く予想が出来なかった。どちらかの病気が発現するかもしれない。最悪、両方もあり得る。安全性、確実性が引き上げられたとはいえ、コーディネイト技術は未だ不安定な部分多かった。似た問題を抱え、弄った遺伝子同士が結びつき、その結果生まれる子供にどのような影響が及ぼされるか。

そんな周囲の反対を押し切り、父さんと母さんは結婚した。そうして生まれたのが俺——シン・アスカだった。

俺が生まれる数年前に、出生前の人間に対するコーディネイトは

既に禁止されていたが、まだお金を大量に積み始め出来なくもない時期だった。俺に遺伝性の病気が発現しないように父さんと母さんは祖父と同じように死に物狂いで働き、金策に走った。それでも、集められたのは健康面に関するコーディネイトを施せるギリギリの金額だった。父さんと母さん、そして当時はまだ生きていた祖父達の祈りと願いを一身に受け、俺はこの世に生を受けた。

健康面へのコーディネイトは完璧に行われ、俺に遺伝性の病気の因子は見つからなかった。

だが、コーディネイト技術の不安定さが俺の身体的特徴に現れた。容姿を調整する遺伝子を全く弄っていないにも関わらず、俺の瞳は赤、肌も白かった。

生まれた時はアルビノ——メラニンの生合成に係わる遺伝情報の欠損により、先天的にメラニンが欠乏する遺伝子疾患——が発現したのではないかと青褪めたらしいが、様々な検査の結果、俺はアルビノではなくどちらかというと白変種に近いという結果が出た。白変種にしては瞳が赤いのは気になるが、視力の低下や皮膚が赤くなる日焼けも見られないというのがその理由だった。

勿論、この結論が出るまで病院通いからは免れられず、大丈夫だと太鼓判を押されるまでに、俺が生まれてから実に5年もの歳月を要した。

俺の健康問題に一段落が着くと、父さんと母さんは俺に、一人っ子では寂しいだろうと口にするようになった。そして、俺が6歳の頃、妹のマユは生まれた。

マユが生まれる頃にはもう、生まれてくる子供にコーディネイトを施す事は完全に不可能になっていた。その為、マユが病気を抱えて生まれてくるかもしれないと、俺も父さん達もとても心配した。けれど、その心配は杞憂に終わった。マユは無事に生まれてきた。しかも、俺の様に様な白変は見られず、父さんと母さんそれぞれに似た茶色の瞳と色のある肌にみんな安堵した。

直射日光に晒されたら視力が落ちるかもしれない、紫外線に当た

れば質の悪い日焼けをするかもしれない。診断結果がでるまでは、俺は滅多に他の子供の様に外で遊ぶ事もなければ、外出することも出来なかった。外出するのはせいぜい病院に行く時ぐらい。マユにそんな日々は送ってもらいたくなかった。

マユが生まれ、家族が増え、幸福な日々が続いて行くはずだった。だけど、そんな日々も長くは続かなかった。

俺が住んでいた東アジア共和国日本自治区は比較的コーディネーターに寛容な地域だった。だが、C・E・70年初めにおきたコペルニクスの悲劇から始まる一連の事件――血のバレンタインに端を発するエイプリルフルクライシスなどをきっかけに、コーディネーターへの風あたりは徐々に強くなっていった。

無理もないだろう。無差別に投下されたニュートロンジャマーは、地球に甚大な被害を齎した。

日本も例外ではない。いくら日本自治区がコーディネーターに寛容な地域だったとはいえ、領土内にニュートロンジャマーを落とされたらまったものではなかった。しかも、領土が狭いにも関わらず、本土に落ちたニュートロンジャマーは2基。その被害は大きかった。

日増しにコーディネーターへの嫌悪は大きくなっていった。特に、俺の様に一目でコーディネイトされているとわかる容姿を持つ人間は外に出ればあからさまに白眼視された。

”悪いのは宇宙にいるコーディネーターであって、地上にいるコーディネーターではない。彼等もまた、我々と同じように被害者なのである”

そう何度も政府やマスコミが喧伝しても、コーディネーターに抱かれた悪印象は払拭されなかった。

俺への迫害が顕著になるにつれ、父さん達はある決断をした。

”オーブに行こう”、と。

「他国を侵略せず、他国の侵略を許さず、他国の争いに介入しない」という理念を掲げ、コーディネーターも受け入れると中立宣言を行

ったオーブならば、俺達も安全に暮らせる。

祖父が生きていれば反対されていただろうが、その祖父も数年前に亡くなっていた。

生まれ故郷を離れるのに抵抗がなかった訳ではない。

祖父が好きだった桜の花が見れなくなるのが嫌だった。

今年は、エイプリルフルクライシスのせいで、毎年行っていたヨシノへの花見ができなかった。移住してしまえば、今度はフシミへ紅葉狩りにも出かけられなくなってしまおう。それも不満だった。それに、俺をコーディネイターと知ってもなお、親友だと言ってくれる幼馴染と離れるのも嫌だった。

何より一番嫌だったのは、大好きだった祖父の墓を置いて行くことだった。

けれど、俺達が迷っている間にどんどこコーディネイターへの風当たりは強くなっていった。日本自治政府がコーディネイターに寛容でも、その上の東アジア共和国が反コーディネイターの色を強くしていたのだから仕方がなかったのかもしれない。

情勢が落ち着くまでの一時的な移住。

そう言っただけ俺達はオーブに移住した。

オーブでの日々は穏やかだった。学校に通い、クラスメイトと遊び、時にはマユと一緒に散歩したり。

ゆっくりと日々が流れていく。

その頃の俺にとって、戦争とは画面の向こうで起こるものであって身近なものではなかった。

”オーブは中立だから”

それが俺達家族の口癖だった。

どこそこで戦闘があった。どこそここの国が内紛状態になった。

全てが画面の向こうの出来事であり、中立であるオーブには関係ない。本気でそう思っていた。今思えば馬鹿な話だと思う。戦争は

常に隣り合わせで、俺達がオーブに来るきっかけになったのも戦争だったというのに。

そして、運命の日がやってくる。

n
e
x
t

I n t r o i t u s 一 入祭唱（後書き）

作者、一人称修行中に、読みにく部分、誤字脱字などがございましたら、感想にてびしばしご指摘、ご指導ください。

Kyrie ー 救憐唱（前書き）

微グロ表現あり。
注意してください。

Kyrie ー 救憐唱

C. E. 71年6月15日

いつものように起きて、父さん母さん、マユにおはようと挨拶をした。

父さんは新聞を読みながら、母さんは朝ごはんを作りながら、マユは朝ごはんを食べながら返事を返してくれた。

どうやら今日は俺が一番最後らしい。

早く食べなさいと急かす母さんに生返事を返しながら、俺はジャムの瓶へ手を伸ばす。

マーガリン、ブルーベリー、ストロベリー、マーマレード。

ここはブルーベリー一択と手に取った。

「マユ、ごはんの時くらい、携帯はしまっとけよ」

「はい」

気のない返事を返しながら、マユは膝の上に置いていた携帯をテーブルの上に置いた。

そして、しぶしぶと食パンを手に取り、ストロベリージャムの瓶に手を伸ばす。

「また生でパンを食べるかよ、マユ」

「いいでしょ。マユはこれがいいの。お兄ちゃんはパパと同じでしっかり焼いたのがいいんでしょ？」

そう言っマユは俺の方にトースターを押しやってくる。

トースターにパンをセットすると、俺はマユのマグカップに牛乳を注いだ。

「ほら、牛乳。飲まないと身長伸びないぞ」

「マユはずっと小さなままでいいもん。お兄ちゃんの方こそ、ちっちゃな男の子なんてかつこ悪いから、お兄ちゃんがいっぱいのだら？」

マユの牛乳嫌いは筋金入りである。

俺は溜め息一つ吐くと、席を立った。

「母さん、オーブン使っていい？」

俺が何をしようとしているのか気づいて、母さんは笑った。

「ふふふ。爆発させないようにね」

「父さんの分も頼む」

便乗してマグカップを差し出してきた父さんに、俺は苦笑した。

「僕はホットミルク係じゃ…」

「マユの牛乳にはハチミツいっぱい入れてね！ お兄ちゃん！」

「ママの分もお願いね」

「父さんのは何もいれなくていいぞ」

続けざまに発される注文に、俺は肩を落とす。

「「「ホットミルク係さんよろしく！！」」」

「はいはい…」

ほがらかな合唱を背に、俺は三人に背を向けた。

三個のミルク入りマグカップをオーブンに突っ込み、適当な時間加熱すれば即席ホットミルクができる。

あとはハチミツなりココアなり、好きにするのが俺の家の流儀だった。

長すぎると爆発するが、短すぎてもぬるくなる。

鍋にミルクを入れてe t c . の過程の手間が面倒だった俺が思いついた方法だった。

多少の思考錯誤はあれど、すぐに丁度いい時間を見つけて、俺は毎朝みんなにホットミルクを出していた。

この日もいつもと同じように、俺はホットミルクの準備をしていた。

ホットミルクが出来上がり、みんなで一息ついた頃だった。

そろそろ出勤しなければと動きだした父さんを見て、俺も皿洗いをしようと立ち上がる。

「あら？ いいのよ、シン。もう出ないと学校に遅刻しちゃうですよ？」

「まだ大丈夫だよ。マユ、いい加減野菜食べちゃえよ。じゃないと、約束してた携帯ストラップ、買ってやらないぞ」

「うー…」

唸るマユの頭を撫でると、流しへ持っていこうと更に手を伸ばす。

その時だった。

耳を貫く重低音。

壁を越し、町中に響き渡る大音。

それがサイレンであると気付いたのは数拍置いたあとだった。

母さんは慌ててテレビのスイッチを入れ、父さんも玄関からリビングへと戻って来ていた。

『C・E・71年6月15日午前XX時XX分。オーブ連合首長国は大西洋連合より宣戦布告を受けました。』

同時に、大西洋連合はオノゴロ沖より領海及び領空を侵犯。モビルスーツの部隊が本土に近付いています。

市街地が戦場になることが予想されます。

国民の皆さんはすみやかにオーブ軍の指示に従い避難して下さい。繰り返します…』

どのチャンネルでも同じことを言っていた。

俺達はテレビを愕然として見た。

オーブが戦争に巻き込まれるなんてあるわけがない。

そう思っていたのに。

テレビは各地区の避難経路を映し出している。

どうやら俺達家族が住む場所は戦闘区域の下真ん中らしい。

「逃げるぞ…」

父さんがポツリと言った。

「最低限の荷物を持て。とりあえず逃げるんだ！」

そう言って父さんが家族を促した。

茫然としていた俺達はそれを聞いて慌てて動き出す。

俺がスニーカーを履き外に飛び出ると、道には車が溢れ、沢山の人々が我先にと非戦闘区域を目指していた。

その鬼気迫る空気に思わず俺の体は立ち竦む。

追って出てきた父さんが道路の状態を見て唸った。

「……裏手に回ろう。少し遠周りになるかもしれないが、裏側の道なら、車も少ない筈だ」

俺の家の裏手の道路は道幅が狭く、普段からあまり車の通らない道だった。

こんな状況ではどうなっているかわからないが、それでも見てみる価値はある。

裏手を見てくると父さんは消え、母さんが簡単にまとめた荷物を俺に手渡した。

「マユ！ 何してるの！？ 急いで！！」

いまだ家の中にいるマユに母さんが声をかける。

お気に入りの茶色い鞆を肩にかけ、マユは不安そうに出てくる。

その手にはしっかりと携帯電話が握られていた。

「マユ、携帯を持ってくのはいいけど、鞆の中にいれとけよ。落とすっちゃうかもしれないだろ」

こんな時でも携帯電話を手放さないマユに、俺は溜め息をついた。神妙に頷き、マユが鞆に携帯電話を入れた所で裏手を見に行っていた父さんが戻って来た。

「裏側なら表より人も車も少ない。急ぎなさい」

戻って来た父さんの言葉に俺達は頷き合い、走り出した。

みんなで必死に走り、なんとか市街から脱出した。

途中戦闘が始まったのか、背後から砲撃音や破壊音が聞こえる様

になった。

俺達の頭上をオーブのモビルスーツ部隊が通り過ぎ、軍用車が道を疾走する。

戦車とも何度かすれ違った。

市街を抜ける直前、振り返った俺が見たのは、攻撃を受けて火の手があがり、破壊される街の姿だった。

その時はまだ、俺はこの最悪の光景を最も忘れないだろうと心から思っていた。

「この山を越えれば、避難船が出る港だ！ みんな大丈夫か！？」
父さんが声をかけてくる。

俺にはそれに返事をする気力もなかった。

ただ、走るのに必死だった。

息は詰まり、何度も唾を飲んだ。

心臓はばくばくとうるさく、胸が酷く痛んでいた。

それはきつと、前を走る母さんやマユも同じだっただろう。

いや、マユの方が辛かったと思う。

幼いマユがあれだけの距離を走ったこと事体、俺にとっては驚きだったのだから。

山を全速力で登り、下る。

途中、岩に滑って転びそうになるも、なんとかこけずに走り続ける。

ふいに、上を何かが滑空する音と共に、低い爆音が轟いた。

思わずみんな立ち止り、不安げに周囲を見回す。

もうすぐ港だというのに。

心配になり、俺は父さんに話しかけた。

「父さん！」

「あなた……」

不安そうに母さんも父さんを見上げている。

マユはしっかりと母さんと手を繋ぎ、恐ろしげに周りを見ていた。
「大丈夫だ。目標は軍の施設だろう」

そう言って父さんは明るく言って俺達を元気づけてくれた。

「急げ、シン」

一番後ろを走っていた俺が心配なのだろう。

異常はなかったとはいえ、幼い頃の病院通いや諸々の要因で外に出る事が少なかった俺は、あまり体力がある方だとは言えなかった。

俺が頷くのを確認すると、みんな走り始める。

港が近いのを横目で確認する。

港では人型の機会が戦っているのが見てとれる。あれがきつと、

モビルスーツというものののだろうか。

つまり、ここも戦場なのだ。

改めて実感する。

眼前には避難船の停泊港が見える。

もうすぐだ。

もうすぐ港につく。

安堵が胸に去来する。

その時だった。

モビルスーツが飛来し、頭上をかすめてゆく。

みんなその場に蹲る。

俺を庇うように、父さんの腕が俺を包む。

なんとかやりすごし、顔を上げるも、すぐ近くにミサイルが落とされる。

服飛ばされた木や土が宙を舞い、俺達は再びその場に蹲った。

マユが細い悲鳴を上げる声が聞こえる。

俺は、大丈夫だと言う言葉をかけることすらできず、父さんの胸に頭を寄せた。

攻撃と攻撃の一瞬の空白。

それを見計らって俺達は立ち上がり、駆け出す。
少しでも早く、その場から逃げだす為に。

俺の背後にビーム兵器の攻撃らしきものが落ち、辺りを橙色に染める。

2体のモビルスーツが激しく戦っているのを後ろ目で見た。

青い翼を持つモビルスーツがビームで攻撃し、それを緑のモビルスーツが避ける度に、辺りが橙色に染め上げられる。

「マユ！ 頑張って！！」

母さんがマユに声をかける。

マユの限界が近い。

一瞬、マユが足をよろめかせる。

激しく揺さぶられたマユの鞆から、お気に入りのピンクの携帯電話が零れ落ちる。

それに気づいたマユは振り返り、足を止めた。

「あ！ マユのケータイ！」

悲鳴のようにマユが叫ぶ。

見やれば、マユの携帯電話はそのまま山の斜面に沿い、転がってゆく。

「そんなのいいからあ！」

母さんが叫ぶ。

「いやあ！！」

マユが泣き叫ぶ。

止まっていたしまったみんなの足。

こんなことしてる場合じゃない。

先を急がなければ。

それでも足が止まってしまったのは、きっと、マユの心が限界を迎えていたからだろう。

不安と、恐怖が、携帯電話という日常の象徴の様なものを落とすことで一気に溢れ出てしまったのかもしれない。

そんなマユを、俺はなんとか元気づけたかった。

疲れた足を叱咤し、一気に山の斜面を下る。

途中、剥き出しになった土の斜面を滑り、携帯電話が引っ掛かった木の袂に止まる。

俺はしゃがみこみ、携帯電話へと手を伸ばし、掴む。

そして、運命の瞬間が訪れる。

爆音。

橙色に染まる世界。

激しい爆風が吹き荒れ、世界が抉り取られる。
その爆風に煽られ、体が宙を舞う。

吹き飛ばされたのだと、気づいた時には既に、俺は地に伏していた。
た。

色々と打ちつけたのか、体の節々が痛む。

悲鳴を上げる体を叱咤して、俺は身を起こす。

頭を振り、埃を払う。

なんとか立ち上がり、俺は振り返った。

大地は抉り取られ、木々は薙ぎ倒されている。

土埃が舞い、辺りが良く見えない。

ふらふらと、俺は抉られた大地へと近づく。

そこは先程まで俺が、家族がいた場所だった。

風が吹く。

砂埃が晴れてゆく。

辺りの様子が露わになってゆく。

ふらり、と一歩、俺は歩く。

最近お腹が出てきたと気にしていた父さん。
もう気にする必要はないだろう。

そのお腹は岩に潰され、潰れている。

ふらり、とまた一步、俺は歩く。

いつも身だしなみに気をつけていた母さん。

今日は婦人会の集まりがあるのだと、おめかししていた。

着ていた服は砕けた木や岩によってぼろぼろになっている。

そして、爆風に飛ばされた木の一部がその胸を貫き、服を、大地を、赤く染めていた。

ふらり、とまた一步、俺は歩く。

はじめて買ってもらった携帯電話を大切にしていたマユ。

見当たらない。

きつと直撃を受けたのだ。

いつも携帯電話を持っていた腕だけが大地に転がっている。

頭上をモバイルスーツが掠めてゆく。

突風が身を揺らす。

ああ：

俺は嘆息した。

いっしょにいないと：

そう考えて俺は動き始める。

父さんを岩の下から引きずり出し、

母さんを串刺した木を引き抜き、
携帯電話を握りしめ、マユの腕を抱えて父さんと母さんの間に身
を横たえる。

仰向けになり空を見上げる。

どこまでも蒼い空。

澄み渡った空。

その場所で、2体のモビルスーツが戦っている。

青い翼を持つモビルスーツが、優雅に天で舞い、下界の人間など
知らぬと言わんばかりに、ビーム攻撃を乱射する。

緑のモビルスーツがそれを避ける。

避けられたビームはどこにいくのだろうと思うと同時に、近くで
また爆音があがる。

視界の端が橙色に染まる。

ああ、死神だ…

俺達は誤って、死神の通り道に踏み行ってしまったのだ。

穢れない空を優雅に舞い、無慈悲に、平等に、死を振り撒く美し
い死神の通り道に。

あれは怖いものだ、頭では考えているのに。

俺の心はかつてない程の幸福感に包まれていた。

みんないっしょ。

父さんも、母さんも、マユも。

みんなと。

いっしょに眠れる。

なんて幸せな事だろう。

きつとあの死神は俺の上にもあの祝福の光を与えてくれる。

根拠のない自信と幸福感だけが、俺にはあった。

父さんと母さんの腕を引き寄せ、マユの腕を抱きしめる。
こんな幸福の中で時を止められる自分は、なんて幸せなのだろう
か。

今すぐにも、時が止まってしまえば良いのに。

遠くに砲撃音が聞こえる。

まるで福音の様に。

体を満たす幸福感に身を委ね、俺は目を閉じた。

n
e
x
t

s i d e . T 「 失楽園 」 (前書き)

グロテスク表現あり。
注意してください。

side. T 「失樂園」

避難民を誘導しながら、トダカは空を見上げた。

近くでは2体のモビルスーツフリーダムとカラムיתיが戦闘を行っている。オーブを守る為に戦うフリーダムに敬意を表す同時に、戦い続けるフリーダムの為にも自分の職務を全うしなければと心を引き締める。

避難船に乗る人々も大分少なくなってきた。この様子ならば、もう間もなく乗り込みも終わり、出港できるだろう。そう思い、トダカは山側を見上げた。

山は市街からの避難経路の一つだが、利用する者は少ない。一見すると最短ルートに見えるが、そこそこ標高があるため、山の外周部を大きく回り道した方が結局早く着くのだ。迂回ルートからの避難民の姿は見られない。この団体で最後だろう、そう思った瞬間だった。

山の木々の間を移動する色。

山道を走る人影。

トダカは思わず目を見開いた。まさか、と驚愕が体を貫く。

人影の頭上をカラムיתיが、フリーダムが、何度も掠め、その度に人影は立ち止る。

前身の血の気が引き、喉がからからに乾いてゆくのが分かる。

ビームが何度も応酬する。

やめろ。

カラムיתיがビームを放つ。

やめろ。

フリーダムが避ける。

爆音。

やめろ。

お返しと言わんばかりにフリーダムがビームを打ち返す。

やめろ。

カラムィティはフリーダムのビームを避ける。

そこにはまだ、私達オーブ軍が守るべき国民が…！

人影に落ちる光の暴力。

吹き飛ばされ、抉られた大地。

その場を目撃し、トダカの足は縫いつけられたかのように動くことができなかった。

もうもうと土煙があがるも、すぐさま空中で戦うフリーダムとカラムィティによって払われる。露わになった抉れた山肌に、ようやくトダカは声を出した。

「山側からの避難民を視認！ 流れ弾が付近に落着！ 救助に行くぞ！ 急げ！！」

他の避難民の誘導に動いていた数人の部下がトダカの号令で動き始める。救助に向かう人員を集めながら、トダカは空を見上げた。

地上の惨劇を知らず、フリーダムとカラムィティはまだ戦っていた。否、この惨劇を彼等が知るなど到底不可能な話だろう。それぞれが己の命を懸けて戦っているのだから。だが、このままでは現場に近づけないのも確かだった。

唐突に、フリーダムの動きが変わった。港から離れ、なんとかカラムィティを避難船のない港――海上へと移動しようとしている。どうやら、港に近づきすぎていたことに気づいたらしい。それがもう少し早ければ、とトダカは思わずにはいられなかった。

「フリーダムが与えてくれた時間を逃すな！ 急げ！」

近づくにつれ、辺りの惨状が露わになる。

吹き飛ばされた木々。

抉られた大地。

向かうのは見た場所。

どうか、誰か、生きていて欲しいと一身に願いながらトダカは走る。

「!？」

トダカは息を呑んだ。

酷く抉られた大地。

薙ぎ倒された木々。

フリーダムの砲撃が近かったのが災いしたのだろう。

走って来た途中に見たどの落着場所よりも、人影がいた場所の状況は悪かった。

だが、トダカが息を呑んだのはその場所の状況ではなかった。

辺りに漂う肉の焦げた臭い。

所々赤黒い土。

大地をよくよく見れば、何か大きなものを引きずった血痕が土に残っている。

大岩の下からは伸びるものは臓物をその軌跡に遺して。

大量の血痕が付いた木のすぐ傍には、大きな血だまりから延びる軌跡があった。

そして。その軌跡の先には――

腹部が潰れ下半身のない男性。

胸部に大穴があき、血に染まった女性。

男性と女性は奇妙にひしゃげた腕をその間にいるに少年へと伸ばしていた。

そう。

幼い子供のものであろう小さな腕を抱え、眠る少年へ。

異様な光景がそこにはあった。

特に少年は、酷く安らかで、幸せそうな微笑を湛えて目を閉じている。

肌の白さに死んでいるのかと思えたが、よくよく見れば少年は無傷だ。しかし、その手は真っ赤に染まっている。

背後で絶句し、立ち竦む部下を尻目に、トダカは少年へと一步を踏み出す。

一步。

一步。

近づくにつれ、鮮明になる光景。

少年の胸が小さく上下しているのがトダカには見えた。それは生存者がいた喜びと同時に、少年自身が、この異様な光景を作り出したことをトダカに告げる。

カチカチと、奥歯が鳴る。

それを必死に抑える。

しゃがみこみ、男性と女性の腕を払うと、トダカは少年の肩に手を置いた。

「おい、おい。大丈夫か？」

肩を揺ると、少年は眉を顰め、ぎゅっと幼い子供の腕を抱きしめた。

まるで目覚めを拒むかのように。

トダカ自身、このまま少年を眠らせておいた方が良いのではないかという思いが胸を過ぎる。

しかし、そうはいかない。

この少年は生き残ったのだ。生き残ったのならば生きねばならない。どんなに辛くても。それが生き残った者の義務だ。

「起きなさい」

何度か強く声をかけてようやく、少年はゆるゆると目を開いた。トダカと少年の目が合う。

少年の目を覗き、トダカは戦慄した。

そこには何もなかった。

悲しみも。

怒りも。

絶望も。

光すらも。

虚ろな紅い瞳はガラス玉のようにトダカを映し、静かに瞬く。その幼い顔には一切の表情はない。

先程まで、幸せそうな微笑を浮かべて眠っていた少年と同一人物とは到底思えない。

呆気取られるトダカを気にすることなく、少年は言葉を紡いだ。

「ここがてんごく？」

後に、トダカはこの時の事を何度も思い出し、自問自答することになる。

生き残ったのならばどんなに辛くても生きねばならない。それが義務だ。そう考え、少年をこの世へと引き戻したことは果たして正しかったのか。

異様な光景の中にあつた少年はあの時、確かに、余人が及びもつかない楽園にいたのだ。そして自分はその楽園を壊した。誰に、少年に、了承も取ることなく。

迫るモビルスーツ。

艦に突き立てられる斬艦刀。

自身の死の間際。

沢山の大切な顔が通り過ぎた最期。

トダカの脳裏に浮かんしたのは、楽園を失った少年の虚ろな眼差しだった。

quid faciam? quo eam?

一体私は何をしたらよいのか？ 一体私はどこへ行けばよいのか？

?

?

夢を見ていた。

とても幸せな夢を。

パチリ、と俺は目を開いた。

まるで機械の電源が入ったかのような明瞭な目覚めだった。

身を起せば、簡素な部屋が目に入る。

オーブで家族を失ってから半年。今、俺ははプラント—— P.

L. A. N. T. .. Productive Location A
lly on Nexus Technology——にいる。

日本に帰るという選択もあったけれど、それは選ばなかった。

迫害を恐れて故国から逃げた挙句、幼馴染と交わした大切な約束を破ってしまったのだ。合わせる顔がなかった。だから、俺はプラントに来る事を選んだのだ。

現在俺が住んでいる部屋は、オーブなどの地上からの移民に、プラントでの常識や法などを教えるディセンベル生活教練校に付属している寮の一室である。大抵は2〜4人部屋らしいのだが、運よく一人部屋が余っていたらしく、諸々の事情を考慮され、俺は一人部屋で過ごす事になった。

つらつらと、此処に来るまでの経緯やオーブで出会った人たちの事を思い返す。けれど、今は起床しなければならない。予定は山のように詰まっているのだから。

俺はベットから出て、キッチンのコーヒーマーカーに豆と水をセツトし、スイッチを入れる。そのまま洗面所に赴き、洗顔、歯磨きを終えると、クローゼットから着換えを適当に引っ張り出す。服のボタンを留めながら、俺は今日行わなければならない事を思い返し

た。

A M 6 .. 0 0 起床
A M 7 .. 4 5 デイセンベル生活教練校 登校
A M 8 .. 0 0 教練校のカフェにて朝食
A M 9 .. 0 0 午前講義開始
P M 1 2 .. 1 0 昼食
P M 1 3 .. 0 0 午後講義開始
P M 1 6 .. 1 0 講義終了 自由時間開始
P M 1 9 .. 0 0 夕食
P M 2 1 .. 0 0 消灯

自由時間は図書館にて読書。

今日のカリキュラムを反芻しながら、手早く支度を整える。鞆をテーブルの上に置くと、その傍に置いてある時計で時間を確認する。

A M 0 6 .. 3 1 —

登校の時間までまだ時間がある。

カーテンを開け、外の光を部屋の中に取り入れる。光、といっても人工の光である。明け方を示す光量が、俺の眼をさす。その眩さに一瞬目を細めると、窓から見える風景を眺めた。しかし、目を覚ましたばかりの町に人影は少なく、ジョギングに励む人の姿がちらほらと見える程度である。

穏やかで、ありふれた光景だった。とても戦時中とは思えない長閑さである。

眼下に広がるその光景を見ながら、俺は本棚から本を抜き出した。帯出期限が今日までの本である。

出来れば読んでしまいたい。

あと少しで読み終わるその本に挟んだ栞に手をやり、ページを開く。同時にコーヒーが出来たらしく、本を読みながらキッチンへと

向かう。マグカップにコーヒーを入れるとそのまま持って、本を読みながら先程の窓際へと戻る。窓際に置いてある椅子に腰かけ、テーブルにマグカップを置く。

テーブルの上に置いてある時計のタイマーを入れ、本に意識を集中させ始める。この量なら多分、家を出る前に読み切れるはずだ。俺は意識を本の中の世界に没頭させた。

P i P i P i P i ……

聞こえてきたアラームの音に、俺は顔を上げた。本を閉じ、ほう、と大きく息を吐く。アラームをとめ、残り10ページを切った読みかけの本に葉を挟む。これなら休み時間に読み切れそうだ。

立ち上がり、本棚に向かうと期限がまだの本を数冊抜き出す。そのまま、テーブルの前に戻り、鞆に本を詰める。充電していた携帯電話もポケットにつっこむと、玄関へと向かう。

しかし、靴を履く直前、俺は忘れ物をした事を思い出した。

俺は必要性を全く感じていないが、呑む事を厳命されているのだからしかたない。キッチンへと引き返す。

食器棚から、薬箱を出し、その中から3つのタブレットケースを掴む。からから振ってそれぞれに中身がある事を確認すると、俺は無造作に鞆の外ポケットへとつつこんだ。

そして今度こそ、俺はディセンベル生活教練校へと向かった。

朝食を摂り終え、講義のある部屋へと移動すると、静かに俺は最前列に座った。鞆から必要な教本を取り出しながら、ぼんやりとこの学校に通う事になった経緯を思いだす。

プラントに移住の申請をしたからといって、すぐに受理される訳ではない。普通の国と同じく色々な検査があって初めて、入国及び滞在が許される。

それに、移住の申請が受理されてもすぐに普通に生活を始められるかと言うとそうではないのだ。念入りに有害な細菌やウイルスを持ち込んでいないかなどを調べる検疫や、身体の状態は勿論、運動、知能、俺の場合は精神まで検診など、様々な工程をクリアし、ようやく移住の許可が出るのだ。

といっても、俺は既にオーブで済ませられるものは済ませており、プラント本国の検疫で1日を潰した後はあっさりと入国する事ができた。

その後すぐに、俺はプラントに住む為に必要な知識を得るべく、プラントでも初等教育全般を担うディセンベル市にあるディセンベル生活教練校に入校した。

本来、ディセンベル生活教練校への入校は、移民に義務付けられるものではなく任意によるものだ。大抵の移民がプラントで生活するにあたって必要な知識などを1週間程度の講習で学んだ後、プラントの各市に散らばっていく。

俺が入校したのは、保護者もおらず、コーデイナーとしても未成年という立場であったためだ。どうやらトダカさん達が俺が生きやすい様にと色々気をまわしてくれたらしい。最長である3カ月のコースを受講する事になっていた。

入校してから早1カ月。ようやく寮での生活にも慣れた。

俺は地上で勉強があまり好きではなかったが、プラントに来てからは自分でも信じられない位、勉強漬けの毎日を送りっている。それが全く苦ではないのだから不思議だ。

それに、最近では面白い遊びも覚えた。

ディセンベル生活教練校のカリキュラムは多岐に渡るが、その中には勿論、俺が地上で学習済みなものもある。

歴史なんかがその最たる例だ。基本的にプラントの設立経緯などがメインなのだが：歴史書は複数読めなんて中学校の先生が言ってたけどその理由が何となくわかった。書き手の視点、見方の視点が変わればこんなにも同じ出来事でも違う様に見えるのだと思い知らされた。笑えるぐらいに食い違う。その差異を見つけるのが俺の遊びになっていた。

あとは宇宙空間に居を構えるプラントならではの、シエルターや酸素ボンベのある位置など防災に関する講義や、独自の生活様式、ルール、マナー、法律などを学ぶ為の講義など、学習事項は多岐に渡った。宇宙空間に放り出されてしまった時のための無重力空間訓練なんてのもあった。

カリキュラムは詰められるだけ詰めておきたかったので、本来なら自由選択領域になる航空力学やらプログラミングなんてのもとっておいた。

とりあえず、講義を受けている間は何も考えなくてすむ。早く講義が始まればいいと思いながら、俺は目を閉じた。

集中していれば時間はあっという間に経つもので、気がつけば全ての講義が終わっていた。俺は帰り仕度をする、図書館に向かうべく学校を後にした。

紅葉する並木道。

落ち葉を踏みしめる。

マユは春より秋の方が好きだったなと思いだしてしまう。一足先に日本に帰ってじいちゃん達とフシミで紅葉狩りにいそしんでいる

ことだろう。稲荷の近くに美味しいお茶屋さんがあったから、そこでお菓子でも食べてるはずだ。腕だけでも、ちゃんと帰ったのだからきっとそうだ。いいな、あそこのお茶美味しくて好きなのに。お菓子が来るまでの時間、拾った綺麗な紅葉を見せてくれて、特に綺麗なのを差し出し俺に言うのだ。

《マユのだけど、お兄ちゃんの目の色に似てるからあげる！》

きっと、この紅葉が行けないのだ。完全に天候が管理できるはずなのに、なぜ、プラントは四季の再現などという無駄な努力をしているのだろう。ずっと過ごしやすい環境にしておけばいいじゃないか。

收拾がつかなくなった思考を放棄すべく、俺は図書館への道を全速力で走り抜けた。

図書館に着くと、俺は一息つき、扉を押して中に入った。閉館までまだ時間はあるものの、紙製の本は早く返してしまいたい。

プラントでは紙製の書籍は珍しい。

限られたスペースしかないプラントでは、紙製の本を置く為に割くスペースすら惜しいのだ。故に、電子書籍が全体の殆どを占め、ただでさえ貴重な紙製の書籍は、更に稀少となっている。そのため、図書館での貸し出しはかなり厳重で、期限までに必ず返さなければかなりの期間の貸出禁止の措置が取られる。度重なれば、図書館そのものの利用が禁止されてしまう。

それだけは絶対に避けなければと、俺は返却手続きを急いだ。

返却手続きをとりながら、俺は次に借りる本を考える。

プラントの図書館は、遺伝子学やら工学やらの研究所やそれに関

連する書籍が多い。俺がよく読む文学や哲学といった本は大抵電子書籍になっており、あっても極僅かである。

電子書籍はデバイスまで貸してくれるのだが、壊してしまう可能性もあるので、紙の本を探してはそれを借りて読んでいる。

返却手続きが終わるとすぐに、書籍検索端末に向かい、手当たりしだい紙製の本を検索する。目ぼしいものをいくつか見つけると、俺は書籍情報を印刷してカウンターへと向かった。

図書館での時間はあっという間に過ぎてしまう。気がつけば、そろそろ帰る時間になっていた。読んでいた電子書籍のデバイスをオフにすると、立ち上がり、俺は図書館を後にした。

放課後や仕事帰りの時間帯。並木道にはそこそこの人影がある。そして聞こえてくる歌声。

今日も歌っているのか、と俺は歌声が聞こえてくる方へと目をやる。

長い黒髪を持った少女が、ギターを抱えて歌を歌っていた。

ストリートミュージシャンだ。

数日前から、この黒髪の少女はこの図書館がある並木道で歌を歌うようになっていた。少女の歌は、曲も詩も良いのに、誰一人足を止めて聞こうとはしない。

ストリートミュージシャンってこんなものだったかな、と俺は不思議に思う。少なくとも、地上で見かけたストリートミュージシャンの周りには、もう少し人がいた気がした。

見た人が良かったからなのだろうか。

俺は時計を見る。

17..23 p.m――

よし、まだ時間はある。

俺は少女の斜め前にあるベンチに向かうと、落ち葉を払い、そこ

に腰かける。

鞆から本を取り出すと、少女の歌を聴きながら、文章の世界へと飛び込んだ。

気がつけば、少女の歌は止まっていた。

帰り仕度をしている。

俺も本を閉じ、鞆に戻すと立ち上がり寮への道を急いだ。

n e x t

side. ? 「友情論 ? | 約束・源 |」

友情論 ?

| 約束・源 |

俺には幼馴染がいる。

家が隣同士で、親同士も仲の良い”オトナリサン”って奴だ。

赤ん坊の頃からの知り合いで、同じベビーベットに寝転がされては、よくじゃれ合っていたらしい。主に、俺がちよっかいだして泣かせるという形でだが。

竹馬の友の名前はシン・アスカ。俺の弟分である。生まれは俺の方が遅いんだけど。

シンが俺の弟分だっているのにはきちんとした理由がある。

あいつは小さい頃は病弱で、家から一步も外に出れない生活をしてた。なんでも、極力、太陽の光を浴びない生活をしなければならなかったらしい。そのせいか、あいつはいつも独りで家の中にいた。

そんな状況を俺の親が放っておくはずもなく、俺とシンはいつも一緒に遊んでいた、らしい。

今となっては、その頃はもう遠い昔の話になっている。

俺が覚えている記憶の中のシンはもう、太陽の下で一緒に遊んでいた。

今まで外で遊べなかったこともあってか、細くよわっちゃったシンは、これまでの運動不足を取り返すかのように、毎日一緒に泥だらけになるまで俺と遊び回った。少し大きくなると体力をつけるべく、俺と一緒に剣道やら柔道やらの道場に通うようになっていた。

それでもシンのよわっちは相変わらずで、稽古のない日には本を読んでいる姿を見かけた。

更に暫くすると、シンの妹のマユちゃんも俺達の後ろについてくるようになった。

マユちゃんはシンとは正反対の活発な子で、俺とシンはいつも彼女に振りまわされていた。

家族ぐるみの付き合いもあって、俺達はよく一緒に旅行に出かけた。

春にはヨシノで花見。

夏には一緒に海水浴。

秋にはフシミで紅葉狩り。

冬にはナガノでスキー。

色々な所へ行っていた。

学校だって俺とシンはいつも同じクラスだった。

俺とシンは時には競い、時には協力しながら、遊びに、悪戯に、勉強にと励んだ。

これからも、ずっと、そんな日々が続くのだと、信じて疑わなかった。

目まぐるしく世界は変わってゆく。

俺達子供の預かり知らぬ所で。

いつのことだっただろうか。

宇宙にいるコーディネイターがニュートロンジャマーをばら撒いた後だった気がする。

テレビが見れなくなって、ゲームで独占できるようになったと喜んだのも束の間、学校でよくシンが嫌がらせを受けるようになった。いじめっ子達の言い分も訳が分からないもので、シンがコーディネイターだからだという。コーディネイターは悪い奴で、シンが空に上がって悪い奴になる前にやつつけるのだと、要領を得ない理由だった。

どうやら親に訳が分からない事を吹き込まれたらしい。シンは俯いてしまい、何も言い返していなかった。だからかわりに、そいつらは俺がとっちめてやったが。

日増しにシンへの嫌がらせはエスカレートしていく。昨日まで仲良くしていた友達がそれに加担していると気付いた時は愕然とした。なんでも、ニュートロンジャマー投下の影響で、父親が失業したらしい。

そして嫌がらせの手がシンを庇い続ける俺の方へ伸び出した時、シンは言った。

「引っ越す事になったんだ」

オーブに。

俺はショックで思わず言ってしまった。

「俺がシンを守れなかったから引っ越すのか？」

そうとしか考えられなかった。

親同士の仲が良く、ずっと一緒に育ってきた俺は知っている。どうしてシンが、いや、シンの家族がコーディネイトを受けて生まれできたのか。

生きるためだ。

何の枷もなく、他人から冷たい目で見られることなく、胸を張って、生きたいように生きるためだ。

そう、俺に教えてくれたのは、シンのじいちゃん——シンのとうちゃんとうちゃんだった。

シンのじいちゃんは、酒好きで、桜が好きで、俺達が住む日本自治区という場所が大好きで、いつもからからと豪快に笑って俺達に構ってくる面白いじいちゃんだった。

俺はシンのじいちゃんが大好きだった。勿論、シンもだ。あいつは一番のおじいちゃんっ子だった。

普段はとても明るい人だったからこそだろうか。記憶に焼きついて離れないのは、シンのじいちゃんが病気の定期検査のために病院へ向かうバスに乗る、その小さな後ろ姿だった。

重い病気を抱えて生きてきたシンのじいちゃん。

暑い夏のある日、縁側でスイカを食べる俺達の横で、こんなことを言っていた。

”わしがこうして長生きできとるのは、科学と医療技術の進歩のおかげじゃ”

”息子や嫁、孫達が忌まわしい病気から解放されたのも、科学の進歩の賜物じゃ”

”今、世間は色々いっとるが、わしは息子を孫を、コーディネイトした事を恥じてはおらん。”

シンのじいちゃんが死んだのが秋だから、その直前の夏だった気がする。

”どうか、ずっと、シンの友達でいてやってくれよ”

男と男の約束だ。

シンのじいちゃんとは、他愛のない約束なら沢山交わしたけど、真剣な大人との、大人の約束ははじめてだった。

だから守りたかった。

約束も、親友も。

いや、約束なんてなくたって俺はシンを守りたかった。

ずっと一緒に育ってきた幼馴染、唯一無二の親友なのだから。

「俺がもっと強かったら…」

その言葉に、シンは笑いながら首を横に振って否定した。

充分だったと。

何があっても傍にいてくれて、庇ってくれて嬉しかった、と。

今度は自分が俺を守りたいから、オーブに行くのだ、と。

そうシンは言った。

そう笑ってシンは手を俺に差し出した。

ありがとう――

白くて細い手。

長袖の下に、沢山の傷があることを俺は知っている。

守りたかった。

大切な幼馴染を。

ずっとずっと。

でも、その為の力は今の俺にはなく、俺はただ、シンの手を握り返すことしかできない。

だから、俺は、俺ができることをする。

日本からいなくなるシンの為にできること。

それは――

「守ってるよ、ずっと、ずっと。お前の家を、アスカのじいちゃん
の墓を。みんな守って、待っててやる。だから――」

お前はお前の家族を守ることだけ考えとけよ。

いつてらっしゃい。

絶対に帰って来いよ。

俺はここで待ってるから。

そう言って、俺はシンと繋いだ手を離れた。

a m i c u s c e r t u s i n r e i n c e r t a c
e r n i t u r .

確かな友は、不確かな状況で見分けられる。

キケロ 『友情論』 より

?(前書き)

作中で取り扱われている病の症状、描写は全て架空のものです。
現実には存在しません。

また、類似のものが実在したとしても、それに対する一切の他意は
ございません。

?

?

あのストリートミュージシャンの歌を聞いてから早1ヵ月。今日も俺は図書館帰りに歌を聴きながら読書をしていた。

あれからほぼ毎日、ストリートミュージシャンの少女は、同じ時間同じ場所で歌っていた。その度になんとなく足を止めて読書をしていたら、そのまま俺の習慣になってしまったのだ。

今日も少女は歌っている。

ギターで奏でる旋律と共に紡がれる切ない歌声。降る雪の様に静かに、そっと心に寄り添う様かのように優しく。歌声は鎮魂歌を紡ぐ。

時期が時期だからだろう。

プラント政府が地球連合に停戦を申し込んでからもうすぐ3ヵ月が経つ。2月のコペルニクスの悲劇を皮切りに始まった今回の戦争は、9月末のヤキン・ドゥーエの戦いを経て終結した。

停戦から早3ヵ月。そろそろ戦場となった場所付近での生存者捜索も打ち切られる時期だ。

生きて帰ってこれた人、死んで帰って来た人、帰ることすらできずに鉄の棺桶の中で真空の宇宙を漂い続けることになった人。

少女は歌う。

傷ついた人の心に寄り添い、帰らぬ人の安寧を祈る歌を。年の変わり目は人々にある種の区切りを齎すだろう。

3ヵ月――

そう、もう3ヵ月も経つのだ。

俺がプラントに来てから。

正確には2カ月と少し。

俺は停戦の少し後にプラントに渡たり、10月の中頃にディセンベル生活教練校に入校した。年が明ければ俺はディセンベル生活教練校を修了し、就職活動を開始しなければならない。

一定の期間、ディセンベル生活教練校の寮に住まい、プラント政府からの生活保護を受ける事ができるものの、その間に生計を建てる為にプラントでの職を探さなければならない。

それもまた当然のことなのだ。

大人になるのだから。

なぜならば、プラントの成人年齢は15歳。

数え年で年齢を計算するプラントだと、俺ももうすぐ15歳になる。日本の成人は20歳だったのでいまいち実感がない。

実感がないものの、現実には眼前にあり、逃れる事はできない。

俺を庇護してくれる存在はもういない。

就職活動、成人――

まだまだ先だと思っていたことが一気に押し寄せてくる。

去年の今頃なら、そんなこと、想像もしていなかっただろう。

クリスマスだ！サンタさんが来る！とはしゃぐマユを宥めながら、俺自身もプレゼントに何を買ってもらうか悩んでいた様な気がする。幼馴染と結託して、互いに欲しいものを打合せ実質2本のゲームを手に入れる、という従来の方法が使えなくなったから、如何にマユを誘導するか色々考えていたはずだ。

今思えば、とても幸せで贅沢な悩みだったのだと思う。

思考を手元の本に戻した。

《神は死んだ》

本の中ではそんな言葉が躍っていた。

神などとうの昔に死んでいる。

思わずそう本に反論していた。

はぁ、と溜め息を吐き、本を読み進める。

持ち出せる紙製の本も大分少なくなり、兎に角ページ数と難しそ

うだという理由でこの本を借りたのだが、全く理解出来ない。それにも拘らず、不思議と読み進めてしまうのは何故だろうか。

データが正しければ、この本は再構築戦争より更に前、少なくとも五百年以上前に書かれた本の筈だ。

しかし、何故か目が離せない。どうして、この本の作者はこんな言葉を文字にして残す程の境地に至ったのだろうか。その背景は、理由は、一体何なのだろうか。読み進めればそれが分かるのだろうか。

ページをめくる。

ページをめくる。

ページを――

？

俺は歌が止まった事に気づいた。

もうそんな時間か、と顔を上げる。

「!？」

思わず目を瞠った。目の前には人の顔。硬直する俺を見て、その人物は小首を傾げ、俺から離れる。

「ねえ、アナタ。いつも私の歌を聞いてくれてる人、ですよね？」
かけられた言葉に俺は数回瞬くと、よくよく目の前にいる人物を

観察した。

そこにいたのはいつもこの場所で歌を歌っているストリートミュージシャンの少女だった。

「え？ あ、うん」

取り敢えず頷き、肯定しておく。俺の反応を見て、少女は嬉しそうに笑った。

「やっぱり！ いつも私の歌を聞いてくれてありがとう！ 私はミーア！ ミーア・キャンベル！ 歌手の卵よ！ あなたは？」

ずいっと再び顔を覗きこまれ、俺はしどろもどろに応える。

「シン：シン・アスカ。ディセンベル生活教練校の生徒だ」

俺の言葉の何が琴線に触れたのかは分からないが、少女―ミーアは目を輝かせて捲し立ててきた。

「生活教練校ってことは、あなた、地上から来た人よね！？ ねえ、地上にはどんな歌があるの？ どんな歌手がいて、何のジャンルの人気があるの？ 何か歌を知っていたら教えてくれない？ 私、もっというんな歌を知って勉強したいの！ あ！ ところで、私の歌どうかな？ 上手い？ 下手？ よく聞いていてくれるから気になっ――」

矢継ぎ早に繰り出される質問の数々に、俺は硬直する。すると、俺の反応をどうとったのか、ミーアはすまなさそうに眉を下げた。

「ご、ごめんなさい。私、地上から来た人と話すの初めてで、……」

そう肩を落とすミーアを安心させるように、俺は言った。

「気にしないで。ちょっと驚いただけだから。えーと…… うん。

君の歌、だっけ？」

俺はミーアが一番気にしているだろう質問を拾ってみる。

どうやら当たったっていらしく、ミーアはうんうんと頷いた。

その素直で直情的な様子に俺は笑みを零す。

「いい歌だと思うよ。癒し、とはちょっと違うな…… そっと寄り添って傍にいてくれる感じがする。俺は好きだよ」

ここ1カ月ミーアの歌を聴き続けた感想を述べる。

きちんとレッスンを積み、更に努力しているのだろう。ミーアが歌う歌のジャンルは幅広く、そのどの歌も高い実力に裏打ちされたものだ。自作であろう曲もなかなか良く、聞いていて安らぐ曲や元気づけられるような曲が多かった。

「聴いていて、心が落ち着く」

俺は素直に抱いた感想を言った。

少なくとも、悪い感想ではないはずなのに、俺が言葉を重ねる度にミーアの表情が暗くなっていく。肩を落とし、ふてくされたようにミーアは言った。

「そんな顔で褒められたって嬉しくないわ」

唇を尖らせ、ミーアは怒っているのか腕を組む。

「そんな顔？」

ミーアの言葉に俺は首を傾げる。

一応、俺は自分で言うのもなんだが、少し微笑みながら言ったつもりだった。小馬鹿にしたように見えたのだろうか？

「無表情よ。さっきから眉一つ動かさないし。淡々と褒められても嬉しくないわ」

「ああ……」

そのことか、と得心した。プラントに来てから他人と深く関わる事が殆どなかったために、すっかり失念していた。

「俺、病氣らしいんだ」

ミーアが驚いた様に目を丸める。

その思い描いた通りのリアクションに俺は苦笑した。

「心のなんだけどね」

言葉と共に浮かべたつもりの微笑を、果たして俺の顔は形作っているだろうか。

オーブ軍に保護された後、避難船に乗せられ、俺は戦場となったオノゴロ島を離れた。

人でごった返す避難船の中を、俺はぼんやりと眺めていたような気がする。

トダカさんに声をかけられ、こちら側に引き戻された後の事は、正直、よく覚えていない。ただ目の前の光景を瞳に映していただけたような気がする。

誘導されるままに歩き、促されるままに乗船し、人波に乗せられ下船した。

多分、トダカさんが気にかけてくれていなければ、俺はあのまま野垂れ死んでた気がする。

戦闘が一段落した後、トダカさんに促され病院で診察を受け、色々な人に会った後に出された俺に対する結論はこうだった。

【諸々の身体機能に異常なし。ただし、精神的なショックのせいで表情を失っている】

表情筋に異常がないにも関わらず、どうやら俺は、笑ったり怒ったりといった表情を顔が作る事ができていないらしい。

家族を目の前で失った大きな感情の負荷を、心が処理しきれず、一定以上の感情を認識しない様にしている。しかも、認識のラインが著しく低い。枷がかけられた心の不安定さが、表情の欠落となって現れたのではないか。

そんな見解を示された。

特に感慨も抱かず、俺はその結果を受け入れた。

そう診断されたからにはそうなのだろう。俺は普通に笑ったり怒ったりしているつもりなのだけど。

そう言えば、余計に質が悪いと言われた。

でも、心を病んだ人間は俺だけだったわけじゃない。あの戦闘に巻き込まれ、家族を、友人を、失った人は沢山いて、心を病んだ人

はその数だけいた。

病院にはそんな人がたくさん来ていた。

俺よりも大人なのに子供の様になってしまっていた人。俺と同じように表情を失っていた子供。聞こえない筈の砲撃音に怯え、唐突にパニックを起こす人。

俺なんて軽度な方だと思う。

よくある戦争がもたらす悲劇の一つ。表情をなくした程度がなんだというのだろう。父さんや母さん、マユは命を亡くしている。

《何も君だけが特別という訳ではない。よくある話しさ。》

そう俺に向かって言ったのは誰だったか。

避難施設の片隅。診察も終わり、日々をぼんやりとすごすだけだった俺に対し、その人は吐き捨てるように言った。

《そこでそうしてるのも君の勝手だろうけど、せつかく拾った命なんだから少しは足掻いてみたらどうだい？ 今の君も、吐き気がする位に鬱陶しいよ》

果たしてその言葉は、俺に投げかけられた言葉だったのだろうか。今となっては、その真意を問う事は出来ない。

ただ、ぼんやりとした日々の中、その言葉だけが異様な色彩を放って俺の中に刻み込まれている。

よくある話し。

そう。

よくある話なのだ。

何もかもが。

「地上で、家族が、ね……」

一瞬の回想の後、そう言えばミーマは目に見えて慌てて、表情を暗くした。濁した言葉の意味がわかったのだろう。

かける言葉を探すミーマを、宥める様に俺は言った。

「よくある話さ。俺自身、さして不便に感じてないし、気にしてない」

だからミーマも気にしないで欲しい。そう言外に行ってみたものの、やっぱりミーマは気にしたらしい。

「ごめんなさい……その、つらいこと、思い出させちゃって……」

「いいよ。さっきも言ったけど、俺は気にしてないし。ところで、ミーマの歌だけ……」

謝ってくるミーマの言葉を遮り、強引に俺は話を転換する。ここまですれば、きっと乗ってくれるはずだ。

「え……？ ええ、そうね。感想、もう一度聞かせてくれない？」

今度はミーマも気付いてくれたらしい。俺が話を変えたがっていることを。だから俺も会話を続ける。

「俺はミーマの歌が好きだよ。なんていうのかな…… こう…… 寄り添ってくれてる感じがする。心を癒すとかじゃなくて、ただ、傍にいてくれる感じ。…… 曖昧でごめん」

随分と抽象的な感想になってしまった。でも、それがミーマの歌から感じた事だった。

俺の感想に、ミーマは嬉しそうに笑った。

「本当！？ 嬉しいわ！ 私も人の心に寄り添いたくなって思いながら歌ってるの！ きちんと伝わってるのね！ 私の想い！ …… 私程度だと、ラクス様のような人の心を癒す歌なんて歌えないから、せめて寄り添いたいって思ってる……」

最初は嬉しそうにしていたのに、最後は何故か沈んだ様に、ミーマは肩を落とした。その原因は恐らく、俺の知らない名前のせいだろう。

「ラクス様？」

聞いた事のない名前だった。その人物は有名人なのだろうか？

「え！？ 貴方、ラクス様を知らないの！？」

ミーアの反応からして余程の有名人なのだろう。

俺が頷くと、ミーアは少し思案気にしてから首を横に振った。

「そう…」

ミーアは少し俯いた。

「？」

俺は首を傾げた。どうかしたのだろうか。

「ミーア？」

名前を呼んでみる。”ラクス様”を知らない事がそんなにシヨックだったのだろうか。

ばっ、っとミーアは顔を上げる。

「！」

俺が驚いているのを尻目に、ミーアは振り返り自分の荷物が置いてある所に駆け寄ると、鞆の中身を漁る。そして何かを取り出すと、走って俺の所に戻り、あるモノを俺に差し出した。

「はい！ コレ、あげるわ！」

差し出されたのは3枚のディスクだった。

唐突な展開に固まる俺に、ミーアは晴れやかに笑った。

「私の歌が入ったディスク！ 実用、保存用、布教用の3枚あげるから、しっかり宣伝してね！」

そう言ったものの、なにか思う所があるのか、ミーアは不安げにしている。

ふと、俺はある事を疑問に思い、ミーアに尋ねた。

「それを受け取ったら、ミーアはもうここでは歌わないのか？」

それなら困る。ディスクでいつでもミーアの歌を聴けるようになるのもいいだろうけど、やっぱり直接聴いた方が良いに決まってる。そう言ったのが意外だったのか、ミーアは目を丸めた。

「直接、もっと聴きたいの？ 私の歌」

ディスクを受け取りながら、俺はミーアの言葉を肯定する。

「ああ」

ミーアは嬉しそうに、本当に嬉しそうに笑った。

「歌うわ。ここで… もとから、もう暫くいるつもりだったし」
ふわりと下がった目尻。

浮かんだ優しい笑顔が、昔に山で見た、霞草に似ていると思った。

n
e
x
t

side. M 「降誕祭」

《風の囀り。

緑の囁き。

海の歌声。

空が、大地が歌う賛歌。

貴女に聞かせたかった。

貴女と聞きたかった。

残念ね。

それももう無理みたい。

ごめんなさいね…》

「はあ…」

大きく吐いてしまった溜め息に、私は慌てて周囲を見回した。

図書館へと続く並木道は本来、そこそこ人通りのある場所なはずなのに、今日は人通りが少ない。

「いても誰も私を気にしない、か…」

思わず呟いてしまった言葉に、私は眉を顰めた。首を横に振り、暗い思考を追いやるとギターを構え直す。

今度は明るめの元気がでる歌を歌おう。そう思って私はギターを爪弾いた。

私がこうして道端で歌うようになってからもうすぐ一年と3ヵ月になる。けれど、道行く人々は誰も私の歌に足をとめない。私がこ

ここで歌っている事に気づかない。それでも誰かに私の歌を聴いて欲しくて、私は歌を紡ぐ。誰かの心に寄り添いたいと願いながら。

私に《歌うこと》を覚えてくれたのは”母さん”だった。”母さん”が良い声だと褒めてくれて、”母さん”が喜んでくれたから私は歌を歌っていた。

レッスンに通い、歌の歌い方を学び、曲の作り方を学び、作詞の仕方を学び――歌に、音楽に関わる事はどんなことでも勉強したけれど、どんな講師の先生よりも沢山のことを私の”母さん”は教えてくれた。

あたたかく迎えてくれる家。

優しく抱きしめてくれる腕。

頭を撫でてくれる手。

慈しみに声。

誰かと食事をする喜び。

誰かを想っての怒り。

誰かの為に涙する哀しみ。

誰かとおしゃべりする楽しさ。

花の囁き。

鳥の囀り。

風の歌声。

月の眼差し。

地上への憧憬。

輝く日々の幸福。

終わりのなき探究への恐れ。

美しい世界への憂鬱。

”母さん”は私に、”世界”の素晴らしさを教えてくれた。

大好きな”母さん”を亡くし、私は、私が歌う意味を失った。

私は歌を歌えなくなった。

”母さん”も歌も一度になくし、失意と惰性の中で私は日々を生きていた。そんな私の耳に響いたのがラクス様の歌声だった。

ラクス様――

ラクス・クライン。

プラント最高評議長の娘。

プラント国民が慕う歌姫。

私の尊敬する歌い手。

奇しくも、ユニウスセブンが核攻撃された”血のバレンタイン”事件の直後、多くに人々が唐突な喪失の痛みと失意に呑みこまれていた時期だった。ラクス様の歌声はその多くの人々の心に響き、癒しを与えた。私の痛みと、彼等の痛みは違うけれど、確かに私はラクス様に救われた。

多くの人々の心を癒し、平和を祈り続けるラクス様。

歌で人を癒し、人を救うラクス様は、私の理想の歌手が具現化したような存在だった。

私もラクス様の様になりたい。

ラクス様の様に、歌で痛みに苦しむ人々を癒したい、救いたい。私の歌で……！！

家のピアノを前に、私はひたすら弾き、歌った。

久しく思いだせなかった、”母さん”の優しい微笑を傍に感じながら。

アルバイトをしながらだけれど、レッスンに戻り、私は沢山のオーディションを受け始めた。

時には、事務所にデモディスクを送ったりもした。いくつかの事務所で色よい返事を貰えたこともあった。けれど、私の容姿を見るなり眉を顰め、首を横に振った。

『どんなに歌声がよくとも、見栄えがしなければ歌手としてデビューするのは難しい』

整ってもいなければ、醜くもない。私の平凡な容姿は、どこまで私の人生に影を落とすのだろう。この容姿のせいで何度も私は選ばれない。

それでも私は諦めなかった。

少しでも私の歌を聴いてもらいたくて、少しでも私の歌で誰かが癒されることを願って、私はギターを片手に町へ出た。

そして気付いてしまった。

気付かされてしまった。

私の声はラクス様に似てる――

はじめはもっと人通りが多い所で歌っていた。同じように歌手を目指し、道端で歌う人達と肩を並べ、張り合いながら。

私の歌に足を止めてくれる人がいた時は本当に嬉しかった。はじめての私のお客さんの為に、私は心を込めて歌を歌った。

歌いきった後、そのお客さんが私に近づいて来た時は本当にドキドキした。

感想を言ってくれるのかな？それともスカウト？

何もかもがスローに見えて、期待に胸を高鳴らせながら、私はお客さんが口を開くのを待った。

『もしかして、ラクス・クライン様ですか？』

心が冷や水を浴びせられたかのように冷え切った。上手く笑えていたか自信はない。

最初の頃はラクス様と同じだと言われて嬉しかった。けれど、何度も、何度も、何度も、同じ事を言われ、しまいには私の歌を遮り、わざわざ声をかけてくる人も出てきた。

『ラクス様の歌を歌ってくれませんか』、と。

容姿は似ても似つかないけれど、声が似ているから聞いてみたい。本物には会えないから、せめて似ている人の歌を。そう願う人々の想いを私は無下にすることはできなかった。

ラクス様の歌を何度も歌った。

ラクス様の歌しか歌っていない日が何度も続く様になった。

私の歌声で誰かが喜んでくれるならそれでいい。

私の歌声を聞いてもらえるだけ幸せ。

そう何度も自分に言い聞かせた。

けれど、気づけば私はここにいた。この、人通りが多くもなければ少なくともない、図書館前の並木道に。

ベンチに座り、私の歌を紡ぐ。

誰かの癒しになれなくてもいい。誰かの救いになれなくてもいい。ただ、傷ついた人の心に寄り添いたい。寄り添わせて欲しい。

私の歌を……！！

そう願いながら歌を紡ぐ。

ふと顔を動かせば、反対側のベンチの端で、男の子が本を読んでいた。近くには図書館があるのできつとその帰りなのだろう。

珍しい紙媒体の本を手を持っている。

読書の邪魔にならない様に、私は曲調を変える。

男の子が心地良い時間を過ごせるようにと願いながら。

あれから頻繁に男の子の姿を見るようになった。

私が歌っている時間を見計らっているのかいないのか。男の子は毎日、同じ時間帯、同じ場所で本を読んでいた。

もしかして私の歌を聴きにきてくれているのだろうか？そうだと嬉しい。けれど期待してはダメだ。そう自分に言い聞かせる。

男の子はとても特徴的な容姿をしていた。

私よりも深い黒の髪に、血の様に真っ赤な瞳、雪の様に白い肌、嫌みのない程度に整った容姿は恐らくコーディネートを受けているのだろう。少し羨ましかった。

けれど、男の子を――彼を深く印象付けるのは雰囲気だろう。容姿そのものは子供っぽさが残っているにも関わらず、纏う雰囲気や表情は大人びていた。

どこか危うく、儚く見えるのに、確かな存在感。虚ろにも見える紅い瞳が、存在のアンバランスさに拍車をかけている。

今日は白いニットの帽子を被っている。頭の上のったぽんぽんがかわいらしくて、映像で見たウサギを彷彿させた。

微笑ましくて思わず私は笑みを零す。

彼のおかげで、私は随分と私の歌を取り戻せた気がする。鬱々としていた気分はこんなにも晴れやかで、心はとても凈いでした。

ラクス様が活躍されたヤキン・ドゥーエの戦いから3ヵ月が立とうとしている。

あの戦いで大切な人を亡くし、かつての私のように失意の中で日々を過ごしている人たちもいるだろう。

今日はそんな人たちのために鎮魂歌を歌おう。私の歌はラクス様の様に人を癒す事も救う事もできないけれど、痛みに寄り添うことはできるはず。

いつも聞いてくれている彼に恥じないよう、祈りと願い、心を込めて。

そして歌い終わったら今度こそ実行しよう。

とっくに出会っている彼と私が、本当に出会うために話しかけるのだ。

「私の歌はどうでしたか」、って。

そして、彼と私は出会う。

少しの痛みと大きな風を伴って。

それまでの私にとって、戦争は近いけれど遠い、別世界の物語だった。

そう。

貴方に、貴方達に出会うまでは。

n
e
x
t

？

？

ミーアに話しかけられてから早3ヵ月。あれからミーアと俺は、頻繁に会話するようになっていた。

会話の内容は基本的に歌の事。そして地上の事だった。

ミーアは生まれとも育ちもプラントのコーディネーターには珍しいタイプだった。その話しぶりから察するに、どうやらミーアは一度、実際に地上に降りてみたいらしい。

更に珍しい。反コーディネーター組織であるブルーコスモスに襲撃されることを恐れて、大半のコーディネーターはプラントに上がっている。

わざわざ危険地帯に行きたがるなんて相当変わり者だろう。そう思ったままに口にしたら、少しむくれながらも教えてくれた。

亡くなった母親がナチュラルだったのだと。地上の話を聞いて育ち、一緒に行こうと約束していたらしい。もはや果たせぬ約束となってしまったが、母親が話していた地上のことを少しでも知りたくて、こうして地上から来た俺に色々と尋ねているのだという。

だから地上――特に自然の有様ななんかを知りたがっていたのかと納得した。俺が日本の四季について話すととても嬉しそうにしていた。

それにミーアは俺が読んでいる本にも興味を持ったらしく、内容を聞いて来た。図書館にあった本を手当たり次第借りているので、正直、俺自身もあまり内容をよく理解できていないことの方が多いけれど、そんな俺の説明もミーアは目を輝かせて聞いてくれた。自分とは違った価値観を持った人との会話は良い刺激になるらしい。アーティストってのはよくわからない。

ディセンベル生活教練校を修了してからは、俺の求職活動につい

でも度々話題に上がる様になった。

「そう…あの会社もだめだったの」

「ああ」

俺の不採用の話を聞いて、ミーマは残念そうに肩を落とした。

「やっぱり、接客系は無理よ。シンが自覚なくとも、他人から見れば無表情なもの。むしろ、私から言わせれば、どうして接客業の会社なんて受けたのか疑問よ」

「俺もそう思うよ…」

改めて指摘されると落ち込んでしまう。あまり自覚がないとはいえ、こう何度も指摘されると嫌でも自覚を促される。

接客業だけは絶対にやめておいた方がいいとミーマに言われ、ちよつと意地を張ってしまった自分が恨めしい。

「俺の成績を考えると、やっぱりプラントの外装修理かデブリ・ジャンク回収業辺りが妥当かな… 一応工業用モビルスーツ運用資格も持ってるし」

教練校で車の免許をとるついでに工業用モビルスーツ運用資格を取っていた事を思い起こす。

「工業用モビルスーツ運用資格って… あの実験、難しいことで有名なのよ？」

「そうか？ 結構、簡単だったんだけど…」

特に実技は簡単すぎてがっかりした位だった。

そう俺が言えば、ミーマは唇をすばめて文句を言ってきた。

「簡単だったら、とっくの昔に私が資格取って働いてるわよ」

外装修理の仕事は給料が良いんだから、とミーマはむくれている。その様を見ながら、俺はなんとなく、こういう時に笑えないのは不便だと思った。

ふと、ミーマの髪に薄桃の何かがついている事に気づく。どこか見覚えのある形に思わず手を伸ばす。

「シン？」

ミーアが小首を傾げ、再び何が見えなくなる。

耳の陰に隠れたのだろう。

見えにくい。

俺の手は耳を掠め、その後ろの髪束を少し払う。

はらり——、とひとひら。

薄桃の花弁がミーアの肩に落ちる。

俺はそれをそっとつまむと、掌にのせる。

「”さくら”だ……」

胸がつまった。

もうそんな時期なのだ。

オーブには桜はなかった。

だからみんなで約束していたのだ。

戦争が終わって、情勢が落ち着いたらすぐに日本へ帰ろう。そして、

またみんな、隣の家族たちとも一緒に桜を、ヨシノの桜を見に行こう。

”約束”——

「ねえ、シン……シンってば！」

はっと我にかえる。

横を見れば、ミーアが心配そうに俺を見ていた。

「大丈夫？ 急に、いつも以上に目が虚ろになって無表情のまま固ま

まってたけど……」

数度目を瞬きさせると、俺は口を開いた。

「大丈夫。ちょっと、懐かしく思っただけだから……」

まだ、あの”約束”を口に出して誰かに話す勇気はなかった。

俺の様子に不承不承ながらも納得したのか、ミーアは視線を俺の

掌に移動させた。

「あら？ この花卉、”サクラ”よね？ どこで見つけたの？」

「いや、さっき、ミーアの髪についてたから：俺の方こそ、どこでこんなのくっつけてきたのか聞きたい」

場所を聞いておかなければならない。当分、桜には近づきたくない。

「えーと： あ！ 多分、あそこだと思うわ！ ほら！ ディセンベル第三バイパス横の大きな並木道！」

「ああ：」

そこなら思い当たる。

寮から足を延ばすには少々遠いが、行けない距離ではない。数度前を通り過ぎた事もあった気がするが記憶にない。

「それにしても、早咲きなんだな。プラントの桜は」

日本の桜の開花時期は、だいたい3月中旬から下旬である。今は3月になったとはいえ、桜が咲くにはまだ早い。

「今年は開花時期を早めるってニュースで言ってたわ。だいたい1カ月位かしら？ 咲き続けて茶色く枯れるの」

「1カ月？」

聞き捨てならないセリフに、思わず俺は聞き返す。日本の桜は1週間足らずで散ってしまっていた。茶色く枯れると言う言葉も気になる。

それに、開花時期を早めるとはどういうことだろう？

押し黙った俺に、複雑な心境を察してくれたのだろう。ミーアは仕方なさそうに肩を竦めた。

「シン。ここはプラントよ。天候システムの操作で、花の開花時期や開花期間を操作するなんて簡単よ」

「そうなのか：」

プラントという箱庭の世界で咲く桜はどうやら、日本――地上の桜とは違うらしい。

それならミーアは、いや、プラントの人間は桜が風に散る様を、

花吹雪を見た事がないということか。とても残念なことだと思った。

一際強い風が吹く。

掌にあった薄桃の花弁はふわりと舞い上がる。俺は花弁が天井の彼方に吸い込まれるのを静かに見送った。

サクラはとてもコーディネイターに似ているのに。

天井の蒼に呑み込まれた薄桃の花弁を想いながらそんな事を考えた。

「シン？ シン？ 物思いにふけるのもいいけど、電話、鳴ってるわよ？」

ミーマの言葉に、俺はズボンのポケットに手を突っ込む。木製の液晶保護カバーを裏にやり、ディスプレイの表示を確認する。

着信は——メールだ。

「あら？ それってもしかして、leafの新型携帯！？ お願い！ ちょっとだけ触らせて！！」

横でミーマが何やら喚いている。そのあまりのハイテンションぶりに、俺はメールを確認もせずに携帯をミーマへ放り渡した。

leafとは、プラントでも人気のパソコンメーカーだ。パソコンは勿論、携帯電話やタブレットPCなどなど色々出している。一枚の葉っぱを、虫が丸く一齧りしたようなロゴはあまりにも有名だ、というのが、携帯を買ったお店の人の言である。

俺自身は、直感的で簡単に操作できてパソコンにも繋げるという点を考慮し、タブレットPCと合わせて購入した。

タブレットPCまで買ってしまったのは、そう、店員のノリに流されてしまったのだ。デスクトップがなければあまり意味がないのはわかってはいるものの、何故か買ってしまった。

絶賛後悔中である。

まあ、インターネットに繋げて、PCメールもできる為、求職活動の役には立ってくれている。

でも、やっぱり、あの出費は痛かった…

「いいなあ…やっぱり、leafから出てる商品って見た目も使いやすいさもいいわよね」

見た目――

そう、見た目なのだ。

一番気に入ったのは。

地上で、オーブで見かけた携帯電話とは似ても似つかないleafの製品群。求職に必要不可欠とはいえ、携帯電話を持つには少々抵抗があった。だからこそ、見た目が俺にとっては携帯電話とは思えないようなものを選んだのだ。

「保護カバーは木製を選んでのね。シリコンカバーもいいけど、こんな木製のもいいかも。なんだか温かみがあるし。でも、ストラップは付けないの？」

ミリアの問いに俺は首を横に振った。

まだ、ストラップを買う勇気が俺にはない。

「ふーん… あ。じゃあ、せっかくだし、私のアドレス入れとくわね。そうすれば私の歌を直接メールに添付して送れるし」

「そうしてくれると嬉しいけど… 俺はディスクも欲しいな」
やっぱりディスクがあった方がいい気がする。特に理由はないけど。

そして、勿論、と付け加えておく。

「両方とも、ミリアが直接歌を聞かせてくれること前提で受け取るから」

俺がそう言うと、ミリアは嬉しそうに俺の携帯に自身のアドレスを送り始めた。

「あら？」

ちょうど互いのアドレスが交換し終わった頃。
ミーアは声をあげた。

「3月10日。ユニウスセブンにて、停戦条約調印 決定」

俺は目を見開いた。

「これって…」

ミーアが心配そうにしながら、俺に携帯を渡した。

俺はディスプレイを見る。

初期設定から弄っていない、ニュースヘッドライン。
流れていく文字。

何度も同じ文字が繰り返される。

3月10日。

ユニウスセブンにて、停戦条約調印――

戦争が、終わる――

n
e
x
t

?

?

C. E. 72 3月10日

ユニウスセブン跡上空において、地球連合とプラント臨時評議会間において停戦条約が締結。

C. E. 71 2月5日に月面で起こった、地球側理事国の代表者と国連総長以下、国連首脳陣が死亡するという最悪のテロ——「コペルニクスの悲劇」に端を発するナチュラルとコーディネイターの戦争は、この日を以って一応の収束を見せたのだ。

条約の中には、核エンジンおよびニュートロンジャマー・キャンセラーの使用禁止やコロイド技術の軍事利用の禁止、MS保有数の制限などが盛り込まれ、そして——

P. L. A. N. T. は Productive Location
on Ally on Nexus Technology から People
Liberation Acting Nation of Technology へと改称。

名実ともに独立国家となったのだ。

戦争は終わった。

終わったんだ。

本当に——？

暗い部屋の中、俺はベッドに腰掛けて思考する。

悲願の独立を果たし、平和が訪れた。

これから良くなる。

何もかもが。

そう人々は口にする。

本当にこれからなにもかもが良くなるのだろうか。

本当に平和になるのだろうか。

本当に戦争は終わったのだろうか。

終わったのならなぜ――？

俺は視線を床から、机の方へと移す。

そこにはディスプレイを光らせる携帯電話とタブレットPC、そして影になって見えないが、ピンク色の携帯電話がある。

同じ会社が作った携帯電話とタブレットPCには、どちらにも同じ画面が表示されているはずだ。

ミニアと別れた後に確認した受信メール。

その差出人は――

Z・A・F・T・Zodiac Alliance of Freedom Treaty (自由条約黄道同盟)

軍からの、勧誘――

平和になったのだと、人は言う。

平和とはなんだ？
戦争とはなんだ？

平和を尊びながら、なぜ人は争うのか。

わからない。

わからない。

そもそも、平和とは作るものなのか？

それとも、守るものなのか？

わからない。

プラントに来てから、逃げるように沢山の本を読んだ。

今まで読んだ事もなかった哲学や心理学、果ては航空力学やプロ
グラミングの本だって読んだ。

どんな本を読んでも、俺の中に答えは生まれなかった。

けれど、今、俺の中に生まれたモノがある。

ユニウス条約締結―停戦を聞いて、このザフトからの入隊勧誘を
見て、生まれた疑問。

俺の望む世界とは何なのか――？

俺が望む世界。

俺自身が得たいと願う世界。

それは一体、どんな姿をしているのか。

俺が望む世界。

父さんがいて、母さんがいて、マユがいて、じいちゃんがいて、
隣の幼馴染がいて――

日本での暮らし、オーブで僅かながらも過ごしていた平穏な日々
そのもの。

ナチュラルもコーディネイターも関係なく、みんなが笑っている世界。

かつて僕がいた世界。

そう。

戦争がない世界――

ユニウス条約の締結により、戦争は終わり、平和が生まれた。戦争が終わるとはすなわち、戦争がなくなるということだろうか。戦争がない状態を平和というのだろうか。

ユニウス条約下の世界に戦争はない。ならば、戦争のない世界の為に俺は何が出来るだろうか。

ベッドから立ち上がり、机へと近づく。

タブレットPCへと手を伸ばし、ロックを解除する。

表示される、メール画面。

ザフトからの入隊勧誘メール。

どうやら俺には、モビルスーツの運用に高い適正があるらしい。

それをザフトで活かしてほしい。

仰々しく飾られた文章の主旨はこんなところだろう。

工業用モビルスーツの試験――特に実技、が異様に簡単だとは思っていたが、それは俺自身の高いモビルスーツ運用適正故のものらしい。

ザフト――軍に、国に、必要とされる――

じいちゃんが生きていたらなんと言っただろうか。

国家に必要とされる――
それだけで泣いて喜びそうな気がする。

第三次世界大戦―― 再構築戦争。

若者は次々に戦場へ送られて行った。

しかし、重い遺伝性の病気を抱えたアスカの家の者―― じいちゃん
が徴兵されることはなかった。

同年代の友人達が次々に出征してゆく背を見送りながら、じいちゃん
は何度も自分自身を呪ったと言う。

共に戦場に赴き、国の為に戦いたい。

けれど、我が身に流れる血が連綿と受け継ぐ忌まわしい病がそれを
許さない。

どんなに心が戦う力を欲しても、肉体がそれを許さない。自分自身
ではどうにもならないからこそ悔しかった。

遺伝性の病を抱えているのだからしかたない、と慰められる度に、
何が分かると言い返しそうになる自分を必死に抑えていたという。

兵士になり、国の為に戦うことが賛美されていた時代だった。

それを成す事の出来ぬ我が身の不甲斐無さ嘆き、じいちゃんは愛
する祖国の為に何かできないか必死に考えたらしい。

兵士になれないのなら、せめて後方で役に立ちたいと決意し、
じいちゃんは難関の大学へ進学する為に猛勉強した。

そして見事、難関大学への進学を果たした。

全てがこれからという時だった。

それが訪れたのは。

終戦――

じいちゃんが愛した祖国はなくなった。

ここはじいちゃんが、僕達が愛した”日本”という地ではない。
むしろ、見ようによっては敵国なのかもしれない。

僕達家族が、オーブに移住するきっかけとなったのは空の化け物
——プラントのコーディネイターによる、ニュートロンジャマー
投下なのだから。

そう言うところ、プラントのコーディネイターはこう返すだろう。

”血のバレンタインの報いだ”

今回の停戦条約の締結地となったユニウスセブン。核攻撃を受け、
壊滅したコロニー。

その悲劇こそが、今回の一連の戦争の発端だと、プラントのコー
ディネイターは思っている。

けれど、地上にいた僕に言わせてみれば、それは違うと言いたくなる。

一連の戦争の発端は間違いなく”コペルニクスの悲劇”だろう。
プラントのその理事国の間で持たれるはずだった国際連合主催の
会議。月面にて行われるはずであったために、月面会議と呼ばれる
その会議は双方話し合いのテーブルに着くことなく終わった。

爆弾テロによる地球側理事国の代表者と国連総長以下、国連首脳
陣死亡という最悪の結果を残して。

この最悪のテロには唯一の生存者がいた。

シーゲル・クライン——

プラント側の代表だ。彼は搭乗していたシャトルの故障により遅
刻し、月面会議の参加者の中、唯一人この難を逃れている。

不可解な生存。

真実の奈辺がどこにあるにしろ、シーゲル・クライン議長のみ存命という動かしがたい事実は地上のナチュラル及び地上在住のコーディネイターに根強い不信感を齎した。

そして、瓦解した国際連合は発展解消され、誕生したのがO・M・N・I・Oppose Militancy & amp; Neutralize Invasion―地球連合だ。

なんのことはない、プラントはプラント自身の手で、自身の敵を作りだしたのだ。

ナチュラルとコーディネイター。

かつての歴史の教科書で習った、第一次世界大戦や第二次世界大戦での、宗主国と植民地の関係に似ている気がする。

けれど、もしそうだとするならば、歴史は繰り返されているということになる。かつては民族というしきりで、現在はナチュラルとコーディネイターというしきりで。

妬しいから、妬んで。

疎ましいから、疎んで。

憎らしいから、憎んで。

傷つけられたから、傷つけて。

撃たれたから、撃ち返して。

人は何度も何度も、同じ事を繰り返している。

今回の戦争の発端は間違いなく”コペルニクスの悲劇”だろうが、そもそも、月面会議が開催されるまでの経緯も複雑だ。経緯を見れば、プラント側の言い分も理解できない訳ではないのだ。

何が正しいのか。

何が悪いのか。

どんなに沢山の本を読んでもわからなかった。

わからない。
答えが出ない。

俺はメール画面から視線を少しずらす。
タブレットPCのディスプレイが放つ光を僅かにうけ、それは輪郭を暗闇に浮かべる。

マユの携帯電話――

視線をメールに戻す。

ここはプラント。
日本ではない。

けれどプラントは、俺に力を与えようと言っている。俺達アスカの家の者がどんなに望んでも得られなかった力。戦う力を。

けれどそれは――

オレンジ色の閃光――

青い翼のモビルスーツ――

土煙が晴れた先の壊れたセカイ――

あの光景が脳裡を過ぎる。

あの青い翼のモビルスーツと同列になるということだ。
無辜の民に死を振り撒く死神に。

あんな奴と同列になってまで、”戦う力”は求める価値のあるものなのか？

俺は再びマユの携帯を見る。

震える手を伸ばし、少し重い、小さな携帯電話を手取る。折り畳み式のそれを、俺はあれから一度も開けていない。充電を怠らず、肌身離さず持ち歩いていても、どうしても開く事ができなかった。けれど今、俺は携帯電話を開こうとしている。

隙間に指を入れ、開く。

真っ黒――

携帯電話の小さな液晶は真っ暗だった。

そういえば、充電はしていても電源を入れていなかったことを思い出す。

馬鹿みたいだと自分を嗤いながら、俺は電源へと親指をやる。

手が、指が、震える。

ほんの数秒、押し続ければいいボタンを押さえ続けられない。

携帯を持つ右手を左手で押さえつけ、ボタンを押し続けさせる。

起動する携帯電話。

立ち上がる画面。

待ち受け画面の中で僕達が笑っていた。

携帯電話を買ってもらったその日に、マユがカメラ機能で撮っていた1枚だった気がする。

俺はデータフォルダを開き、更にカメラのフォルダを開く。

父さんが笑っている。

母さんが笑っている。

僕が笑っている。

ああ、これは僕がマユの携帯を借りて撮った写真だ。こっちはマユの誕生日会の写真。

オーブの家の周りの写真。

これはオーブの海に行った時のだ。

僕はボタンを押し、次々に写真を見て行く。

もっと。

もっと。

もっと。

写真が一番最初に見た物に戻る。

そう、一番最後に撮られた写真に。

それは僕がホットミルクを入れている姿だった。

日付はあの日。

71／06／15――

どうやらマユは、僕の気が逸れている隙に携帯を弄っていたらしい。

あ、と思いだし、僕はデータフォルダからメインメニューに戻り、あるモノを探す。

携帯電話を買ったその日、既製のものが気に入らないと、マユが吹き替えていたモノ。

設定――

留守電機能――

再生音声――

ボリウム――

最大にして、俺は確認のボタンを押す。

『マユです！マユはいま、でんわに出ることができません。ピッというはっしんおんのあとに、メッセージをいれてください！』

ああ！！

俺は何を迷っているというのだろう！

力がなくては何も守れない！！

力がなかったから、僕の守りたいと思ったものの全てがこの掌から零れ落ちて行った！！

今の俺には何も無い！！

何もない！！

守りたいものなど、何一つない！！

俺はもう一度マユの声を聞こうと、携帯電話を操作しようとする。しかし、液晶の画面は省エネの為、真っ暗になっている。

「力がなくちゃ、何も守れない——……」

気付けば発していた言葉は、俺の中の心情に反して、冷たく平坦だった。

真っ黒な液晶には俺の無表情が映っている。こんな時にすら、壊れた俺は涙一つ流せない

それが余計に僕の心を煽る。

ずっと、このままでいるつもりなのか、と。

表情を失くし、感情は壊れ、何一つ持たず、空虚なまま生きていくのか、と。

「力が欲しい——…」

今の俺に、大切なものは何一つない。

けれど、ずっとそのままでもいいはずがない。
いつか俺も、大切なものを得るはずだ。

「戦かう力が欲しい」

大切なものを守る力を！

今は何も持たなくても、いつか得る大切なものを守る為に！
力を！

戦う力を！！

俺はマユの携帯を机の上に置くと、タブレットPCに指を滑らせる。
る。

そして、メール本文のURLに触れる。

入隊志願書――

必要事項を記入――

キーボードを呼び出し、次々に記入してゆく。

多くの必要事項を記入し、後は送信ボタンを押すのみとなった。
迷いなく、俺はその送信ボタンに触れようとする。

瞬間。

脳裏に過ぎるあの光景。

壊れたセカイ――

今度は俺自身が、誰かのあの光景を作りだす事になるのかもしれない。
ない。

一瞬の逡巡。

それでも、それでも俺は、僕は――

送信ボタンに触れる。

それでも僕は力が欲しい。

n
e
x
t

?

?

決意の日から1週間。

俺は今、アカデミーザフトの士官学校の寮にいる。

士官学校の寮は二人一部屋が基本らしく、ベットが二つ備え付けである。簡易キッチンやシャワーもあり、基本的なルールを作れば二人の人間が余裕を持って暮らせるだけのスペースはあるだろう。

同室の人間はまだ来ていない。

それも当然だろう。何せ、まだ入学しまで1週間以上もある。

生活教練校の寮暮らしだった俺は、士官学校の寮の入寮可能日すぐに入寮したのだ。私物などほばないに等しく、私服や下着全てが少し大きめの旅行鞆一つにまとまった。

それらの整理も既に終わり、俺は一息ついて部屋を見回しながら、これまでの事を思い返した。

入隊の為の試験や検査があると身構えていた俺の下に来た返信メールの内容は意外なものだった。

それは士官学校への推薦状。

ザフトは志願制の軍だと聞いていた。俺には工業用モビルスーツ運用資格取得の件もあるので、志願したら即入隊かと思っていたがどうやら事情が違うらしい。

最初に来た勧誘メールと返信メールを見比べ、俺は自分自身の早とちりに気づく。

返信メールを読み、いろいろ調べてみると、どうやらユニウス条約締結によるプラント独立に伴い、ザフトの士官学校が新設されることが決定したようだ。

以前までは、形式的には理事国の管理下ということもあり、ザフトはプラントの有様を憂う志願者が組織する民間の義勇軍という体裁をとってきた。しかし、一つの国としての独立を獲得した今、必要なのは本業を別に持つ志願兵ではなく、職業そのものが軍人である職業軍人である。国家として、国民の安全を保証し、独立性を維持するには職業軍人は必要不可欠だ。

そこで決定したのが、職業軍人を作る為の士官学校の設立である。士官学校そのものはザフトの創建と共に設立されていたが、それはどちらかというと民間からの志願兵に一通りの軍事訓練を施し、少しでも早く戦場へ送り出す為の機関という、本来の意味での士官学校とは程遠い場所だったらしい。

そういった事情もあって、これを機に、国防の為の専門的軍事教練を施された士官の育成を行う士官学校の新設が決定したようだ。

俺にはそこで、専門的軍事教練を受けた上で、士官としてザフトで活躍してほしいのだという。

モビルスーツに乗って戦う”兵士”ではなく、ある程度の部隊指揮の能力を持った”士官”を必要としているらしい。

教練期間は1年。この期間が長いのか短いのか、軍事に明るくない俺にはよくわからない。

だが、ザフトに対する俺のもともとのイメージが、個々の能力に絶対的な自信を持ち、前線の兵士に幅広い判断を任せている、というものだっただけに、このメールの内容には驚いた。やはり、独立して一つの国として存在するようになると、国防に関する見解も変わってくるものなのだろうか。

そんなことをつらつらと思いながら、俺は士官学校への進学手続きの書類を記入して送信した。

そして返って来たのが筆記試験免除の知らせと寮の入寮手続きだった。

筆記試験は、俺が持つ工業用モビルスーツ運用資格のおかげで大半が免除され、他にも教練校で手当たり次第とった資格が効力を発

揮した。教練校での成績がそのまま持ち上げられる事になり、事実上、全筆記科目免除ということになったのだ。

これには驚いた。教練校に入れるように手続きしてくれたオーブのトダカさんには本当に感謝の念が尽きない。

そういえば、プラントに発つ俺を見送りに来てくれた時、トダカさんが言っていた。俺がプラントに渡れるように手助けしてくれた人が別にいる、と。いつか、その人にも直接お礼を言いたい。

そう思いながら俺はLeafのタブレットPC―Leaf Fileに送られてきたこれからのことを指示する書類に目を通した。

次は入寮手続きだ。

士官学校は全寮制なので、入学式までに入寮日を指定して入寮しなければならない。

一番近い入寮日は来週の水曜日。その日を指定して、必要書類全てを送信する。

送信完了を確認すると、すぐに俺は荷作りに取り掛かった。

それから数日間を、荷作りや教練校の退寮手続きなどに費やしていると、水曜日はあつという間にやってきた。

ザフトの士官学校があるのは奇しくも、近づかまいと誓ったディセンベル第三バイパス横の桜並木の先だった。

絢爛豪華に咲く桜を視界に極力視界に入れない様に俯き、急ぎ足で桜並木を抜ける。

門の横にある守衛室に顔を出し、警備員に入学生である事を伝え、教練校の寮でプリントアウトした書類を見せた。警備員は一瞬驚いたように書類と俺を見比べると、すぐに笑顔になって中に入れてくれた。

俺は警備員からもらった地図を見ながら、書類を渡す為に管理棟を目指した。幸い、管理棟はすぐに見つかり、書類を係りの人に提出する。そのかわりに、士官学校の規則や寮での規則、訓練科目の概要などのデータが入ったディスクと寮のカードキーが俺に渡され

た。

パソコンは学生一人にデスクトップが1台宛がわれるらしい。ありがたく思いながら、俺は寮への道を急いだ。

そうして俺は寮の部屋にいる。今までの事を思い返ししながら荷物の整理をしていたら、あつという間に時間が経ってしまった。

時計を見ると、時間はすでに13時を過ぎている。意外に長く作業をしていた事に驚きつつ、俺は昼食をどうすればいいのか考え始めた。

部屋には共用の冷蔵庫が備え付けてあるが、当然中身はない。

先程もらった地図を取り出し、食堂の場所を確認する。

食堂は開いているのだろうか。

寮への受け入れが始まっているのだから、食堂もきっと営業しているだろう。していますように。

そう思いながら、俺はカードキーとタブレットケースを手にとった。

校内の散策や、実践も兼ねた校内アルバイトの申請などの諸々の手続きをしている内に、時間はどんどん過ぎて行った。

気付けば、入学式まで丁度1週間になっていた。

この頃になると、ちらほらと同期の姿が見え始め、士官学校内にも確かに活気づき始めていた。

そして、ついにと言うべきか、ようやくと言うべきか。俺の同室者もやってきた。

そいつの名前はレイ・ザ・バレル。

レイ・ザ・バレルが部屋に入って来た時は、なんというか、そう、

身に纏う空気に首を傾げた。

何かが、違う。プラントはコーディネイターの国だ。だから、目の前にいるレイ・ザ・バレルもコーディネイターであるはずなのだが――

既視感？ 懐かしさ？ 切なさ？ 申し訳なさ？

いろいろなものが縋い交ぜになった感覚が俺を襲った。

それが一体何なのか。レイ・ザ・バレルとこの部屋でのルールを決める為に色々と話している内に気づいた。

同じ感じがするのだ。地上にいるナチュラルの親友と。

見た目は勿論、二言三言話ただけでもわかる性格も違うのに、何故か俺は親友とレイ・ザ・バレルの間に共通する何かを感じた。その正体はいったい何なのか、皆目見当もつかず、俺は一旦、その件に関しては思考を止めることを決定した。

「それでは、同室で過ごすにあたってのルールはだいたいこんなものでいいか？」

レイ・ザ・バレルの言葉を、俺は肯定する。

「ああ」

互いに簡単な自己紹介をした後すぐに行ったのが、この部屋で互いが快適に過ごす為のルール作りだった。ルールといっても、「互いの私物は触らない」や「洗濯物の当番」なんかの必要最低限でありきたりなものばかりだ。

「だが、本当にいいのか？ 私の要望ばかり通してしまったが、先にこの部屋を使っていたのは君だろう」

どうやら俺側からの要望が少ない事が気になるらしい。

俺に言わせれば、レイ・ザ・バレル側からの要望だって多い訳じゃないかった。むしろ、俺とレイ・ザ・バレルの要望が殆ど合致した為、俺側からの要望が減ったというのが正しい。

「いいよ。お、僕が言おうとしてた事、だいたいバレルさんが言ってくれましたし」

「レイ、と呼び捨ててくれて構わないと先程から言っているだろう。私と君は同期だ。気負わなくてもいい」

そう言われても、と俺は内心唸る。会って数分もしない人間を呼び捨てするなんて失礼な気がする。何より、レイ・ザ・バレルの纏う雰囲気が無駄に緊張感があるのでつい、口に吐く言葉が丁寧になっってしまうのだ。

ひとしきり考え、俺はレイ・ザ・バレルに提案してみた。

「ならこうしまー あー… こうきめよう。俺と、レイとの間では敬語もなし。フランクに。普通に話す。それでいいか？」

「ああ」

俺からの提案に、レイは満足そうに頷いた。

レイは一見、無表情に見えるが、実は感情豊かなのがこの短いやりとりでなんとなくわかった。俺みたいな無表情、というよりはただ単に仏頂面なだけなんだろう。

話題も一段落着いた所で、俺はレイに提案してみた。

「レイは今日来たばかりだろ？ 俺でよければ校内の施設を案内するけど必要か？」

この士官学校はそこそこ広い。俺も慣れるまでに結構時間がかかった。

「ああ、頼む。俺もこの後に施設の確認をしようと思っていたんだ」
口調は相変わらずだが、一人称が”私”から”俺”に変わっていた。

なんだ、レイも緊張してたのか。

なんだかほっとして和んだ。

「へえ… レイはピアノが弾けるのか」

校内を案内する道すがら、互いの当たり障りのない話しを交わす。ピアノが弾けると言う言葉に、俺はやっぱり得心した。そんな顔をしてる。

「ああ。手慰め程度だがな。そういうシンは、何か楽器が弾けるのか？」

レイの手慰めがどのぐらいなのか、今度聞いてみたいと思いがながら、俺はレイの質問に返す。

「俺はそういうのさっぱり」

音楽の成績はいつも可もなく不可もなくの至って普通のものであった。それでも、音楽を聞いたり歌ったりするのは好きだったが、楽器の演奏には興味が持てなかった。

一度、ミーアにギターを借りて弾かせてもらったことがあったけどすぐに返した。

右手と左手を別々に動かすのがかなり難しかった。慣れたら誰でもできると言っていたが、俺が慣れるには当分かかりそうだった。

ミーアはアレを弾きながら歌うのだから本当に凄い。

けど、俺のギター演奏を聴いて笑い転げていたのは絶対にゆるさない。いつか絶対に、楽器演奏でミーアを驚かせてみせる。

「あー、でも将棋や囲碁なら少しできる」

流石に、あまりにも楽器が弾けなさすぎて笑われたことを話すのは恥ずかしかったので、かわりに俺が出来ることに話題をすり替える。

「ショージ？ イゴ？」

物知りそうなレイの声音に少し不思議そうな気配が混ざる。

プラントには囲碁や将棋がないのだろうか。

「どっちもじいちゃんから教わったんだ。将棋は、まあ、チェスみたいなもん？」

全然違う、というじいちゃんの怒鳴り声が聞こえた気がしたが、それ以外にわかりやすい喻えが思い浮かばなかった。

ごめん、じいちゃん。

「チェスなら俺も少しできるな。良ければ教えてくれないか？」

どうやらレイは将棋に興味を持ってくれたらしい。将棋も囲碁もチェスも相手がいなければ成り立たないゲームである。相手ができることは願ってもない事だ。

「いいよ。そのかわり、レイも俺にチェスを教えてくれよ。ついでにピアノも」

「？ チェスは別に構わない。簡易チェスボード程度なら持ち込んでも良かったはずだからな。だが、なぜピアノも？」

うっかり口に出してしまっていた蛇足に、レイが反応した。滑ってしまった自分の口を呪いながら、俺は答えた。

「その： 一度友達のギターを貸してもらって弾いたら爆笑されて： 何か楽器が弾けるようになって、絶対に驚かせたいんだ」

結局言う事になってしまった俺の恥ずかしいエピソードに、レイは目をぱちくりさせた。

そしてクスリと穏やかな笑みを零した。

「了解した。お前の名誉が回復できるように尽力しよう」

ククッとお腹を抱えるレイの頭を、俺は思いつきりはたいてやった。

俺が特に入り浸っている図書館とシミュレータールームも案内し終え、案内する場所に残り1ヶ所になった。

あって当たり前だが、あまりお世話になりたくない、そんな場所だ。

「ほう： シンは工業用モバイルスーツの運用資格を持っているのか」
シミュレータールームを出た後はやはり、モバイルスーツ関連の話しが話題の中心になる。

「うん。俺は入寮可能日からここにいるけど、今日までずっと図書館とシミュレータールームに入り浸ってた。やっぱ、工業用と軍事用だとシミュレーターも大分違うよな」

工業用と比べると、軍事用のシミュレーターで出来る事は圧倒的に多い。色々と設定をいじりながら毎日入り浸っている。最近はOSを弄ることもしだしたのだが、備え付けのマニュアルを見ながらなのでなかなか上手くない。

「レイも航空科だよな？ 何か特別な勉強でもしてたのか？」

確か自己紹介の時に、レイも航空科だと言っていたはずだ。

航空科はモビルスーツパイロットを育成するコースだ。モビルスーツパイロットは花形であると同時に、入学の為の難度も高いらしい。俺の知識は教練校でのものが大半なので、出来れば色々教えてもらいたい。

「…… きょう、だいがモビルスーツパイロットをしていてな。その人から色々手解きをしてもらったんだ」

歯切れの悪い言葉に俺は首を傾げた。

「レイには兄弟がいるのか？」

「ああ。兄、が、いた」

過去形で語られるそれに、俺は目を細めた。

「あ。そろそろ着くぞ」

強引に話題を変える。

互いに触れてほしくない部分は沢山ある。ましてや、俺とレイはまだ初めて会ってから1日も経っていない。そんな人間が聞いている事ではないだろう。

レイの手を引き、少し歩調を速める。

「もうすぐ夕食だし、急ごう」

目的地に着くと、俺はレイの手を離した。

「ここが医務室だ。お互い、あんまりお世話になりたくないよな」
コーディネイターに病気は少ないとはいえ、訓練中に怪我などは

付き物らしい。その治療の為の場所として、医務室はあるらしい。
そして医務室には別の役目として――

「うおっ、危ないな。ん？ シンじゃないか」

俺達の目の前で扉が開き、中から人が現れる。

「こんにちは、リック先生。レイ、この人がこの医務室の主だ」

既に何度か顔を合わせた事のあるリック先生をレイに紹介する。

俺はこれから度々医務室に顔を覗かせる用事がある。リック先生とは、その旨を伝えに行った時に親しくなった。

「おお、君がシンの同室の子だね？ 私はリック・マウアー。専門は―― 平たく言えばカウンセラーだよ」

そう、ここの医務室はカウンセラーを常駐させているのだ。

なんでも、訓練の最中に色々あるらしく精神的な治療を施す事案が偶にあるらしい。士官学校と言う特殊な学校であるが故に、らしい。

「ちょうど良かった。シン、今から君の所に行こうと思っていた所だったんだ」

リック先生は手に持っている袋を俺に手渡してきた。

「新しい薬だ。今日届いてね。何かあったらすぐに来るんだよ。――

――レイ君も」

そう言って、先生は忙しいのか立ち去っていた。

その背を見送りながら、レイは俺に尋ねてきた。

「シン、君はやはり何か病にかかっているのか？」

”やはり”、とつけて来る辺り、レイも薄々感づいているのだろう。

「気づいてるだろうけど……俺の顔、表情ないだろ？」

レイが頷く。ならば、隠していても仕方がない。

「病気なんだ。心のな。俺は普通に笑ったり怒ったりしてるつもりなんだけど、顔面の筋肉が何故か動いてくれないんだ。これは、まあ、その病気の為の薬」

俺は袋を示す。

「君は： 病であることを隠さないのか？」

ミーアから聞いた事がある。コーディネイターの中には、病気になる事は不名誉であるという風潮があるのだと。

病気にかからない様にコーディネイターの遺伝子は調整されている。にも関わらず病気になるなど、コーディネイトが失敗したとか考えられない。

ウイルス性だろうが心因性だろうがなんだろうが、白い目でみられるのだという。

「隠してどうなるっていうんだ？ 俺の場合は顔っていう隠しようのない場所だ。仮面でもするなら話しは別だろうけど、なんかめんどくさいし。それよりは、最初から病気のこと伝えてた方が楽だろう？」

そう、隠した所でいつかはバレる。その時に、何故黙っていたとか、色々と問い詰められるより、最初から公言していた方が楽だろう。

「病気も、俺自身― シン・アスカの一部って認識してもらった方が、少なくとも俺はいい」

そう言うと、レイは怪訝そうに尋ねて来る。

「何故そう思う？」

なぜと聞かれても困る。

「なぜって…… 俺の家の家訓？ じいちゃんからの受け売りなんだ。コーディネイト技術のおかげで解放されたけど、俺の家は遺伝性の病気を抱える血筋だったから」

豪快に笑っていたじいちゃんの事を思い出す。

いつも元気で、病気とは無縁そうに見えるじいちゃんの体には治しようのない病魔が巣食っていた。それすらも自分の一部と豪語出来るじいちゃんとは本当に強い人だったのだと思う。

「…… そうか」

レイも何か思う所があるのだろう。複雑そうな顔をしている。

「気になるか？」

「いや、気にしない。病気も含めて、お前自身なのだろう？」

俺の問いに、レイは即答してくれた。

まっすぐに俺を見て来る空色の瞳に、思わず俺は俯いた。

「……ありがとう」

俺が出会う人はどうして、こんなにも優しくて良い人ばかりなのだろうか。

喜びで溺れそうだ。

就寝時間――

あの後、食堂で食事をとると、俺達は早々に部屋に戻った。交代でシャワーを浴び、早々に床に着く。

隣のベットからレイの気配を感じる。

誰かの傍で眠るのは久々だった。

そのせいか、なかなか寝付けない。どうやら自分が思っている以上に、緊張も高揚もしているようだ。

そういえば、と思います。

ミーアにザフトの士官学校に入る事を伝えていなかった。

あの日――ユニウス条約締結決定のニュースと一緒に見て以来、ミーアには会っていない。

ベッドサイドテーブルに手を伸ばし、Leafの携帯を手取る。

”ザフトの士官学校に入った。休日には歌を聞きに行けそうだけど、それもまちまちになりそう”

用件を入力し終え、俺はメールを送信しようとした。だが、何か
が引っ掛かる。

俺はもう一度文面に目を通す。

「……」

目を瞬かせ、俺は文章を追加する。

” ごめん ”

今度こそ、送信ボタンを押す。次に会った時が怖い気がしたが、
そこはスルーしておく。

送信を確認した後、ベッドサイドテーブルの引き出しからイヤホ
ンを取り出し、Leafの携帯と繋ぐ。

イヤホンを耳に装着し、音楽を再生する。

流れて来る優しい調べ。

ミーマの歌。

俺は枕の下からマユの携帯を取り出すと、音を立てない様にして
開く。

待受画面では、相変わらず僕達が楽しそうに笑っている。

「父さん、母さん、マユ——」

僕、頑張るから。

絶対に、戦う力を手に入れて見せるから。
だから見てて。

心の中で呟く。

” 何を ” と問う内なる声は聞こえないフリをした。

n
e
x
t

?

?

レイとの出会いから数日間。

俺達二人は図書館やモビルスーツシミュレーターに入り浸りながら時間を過ごした。

レイは頭が良いらしく、俺だけでは全く捗っていなかった軍事関係で必要とされる知識を色々教えてもらった。

けれど、黒衣の独立宣言全文、プラント独立大憲章、忠誠宣誓、プラントにおける軍事関連の法律、ユニウス条約や他、地球上における捕虜や宇宙船舶監査の際のなどの諸々の慣習や条約、取り決めをすべて頭に叩き込めと言われた時は目眩がした。

俺には遺伝性の病気を克服する為に、体力などの身体能力を向上させるコーディネイトを施されているが、知的方面のコーディネイトは全く施されていない。知能に関する能力はナチュラルと変わらないのだ。

そうレイに言うと、あいつは真顔でのたまった。

「大丈夫だ。お前になら出来そうな気がする」

俺は見逃さなかった。レイの肩が少し震え、口角が僅かに上がったのを。

おのれ…… こいつ、からかってるな。そんなに俺がモビルスーツシミュレーターでフルボッコにしたことを根に持ってるのか？根に持ってるんだろ？うな、こんちくしょう。涼しい顔して執念深い性根をお持ちなようで。

「わ、わかった。覚えてやろうじゃないか。その、いんでいぺんてんす？マグマ・カルらとか色々」

「the Magna Carta of Independenceだ」

売り言葉に買い言葉とはまさにこれだろう。かくして、俺とレイの勉強漬けの日々が始まった。

頭が沸騰しそうになるまで図書館に籠り、独立大憲章や忠誠宣誓は勿論、色んな条約の条文やら実例やらを丸暗記し、互いに間違っている所を指摘し合った。

どちらが先に折れるか、意地の張り合いになっていたのだと思う。そうして図書館やモバイルスーツシミュレーターにとぐだぐだしていたら、気づけば士官学校入学式の当日になっていた。

「なんかレイが来てから、時間が過ぎるのが早くなった気がする…… スイス連邦」

入学式が行われる大講堂に向かう道すがら、俺とレイは他愛のない会話を交わす。

その中に、覚えたばかりの事を織り交ぜる。今朝、Le;Fileのニュース配信アプリで見た記事の中にあつた気になる単語の一つだ。すぐに色々調べて覚え込んだ。

「奇遇だな。俺もお前に出会ってから時間が流れるのが異様に早くなった気がしていたところだ。ヨーロッパの永世中立国。再構築戦争に参戦していない国の一つ」

俺の会話に返事しつつ、レイはさらりと返答して来る。

「ついにてP・L・A・N・T・に所属しない、プラント群”ヘルヴェティア”の理事国だよな」

「正式には、スイス連邦ヘルヴェティア州だ。

多くの理事国が自国の建造したプラントとの溝を深め、対立する中、スイス連邦は地上の自国と全く変わらぬ法の運用をヘルヴェティアに行い、権利の保障や義務の負担を課した。

その為、他プラントで起こった、プラント議会と理事国が主催するプラント運営議会との対立が起きず、黒衣の独立宣言にも賛同しなかった。むしろ、我々はスイス連邦国民である、という宣言を行い、先の大戦では地上のスイス連邦同様不参加、静観を貫いた。

地上と宇宙という距離に隔てられながらも、確かな絆が結ばれた、ある意味、理想的なプラントと理事国の関係を築いているプラントの一つだな」

間髪入れず、レイは俺の拙い知識を補足する。博学というか、本来にレイは色んな事を知っていると思う。

「でも、反面、あそこってすごく物騒な所だよな？地上でも宇宙でも国民皆兵制で徴兵制があるんだろ？」

調べた時、真っ先に出てきた項目を反芻する。

国民皆兵制――つまり、あのプラントに住んでいる人間全てが兵士という事だ。読んだ記事には確か、買い物にも自動小銃を持って行くと書いてあって驚いた。

「ああ。それに目が行きがちだが、それ以上に脅威なのは金融関係だな。

知っているか？ヘルヴェティア・ワンにはスイスでも著名な銀行の支店が複数あり、地上と変わらぬサービスを提供している。

プラントの有力議員の中には、ヘルヴェティアのスイスの銀行で蓄財を行っているものも多々いるらしい」

俺の付け焼刃な知識は見事に、レイに返り討ちされた。そう言えば、国民皆兵制の項目の近くに、それよりも大きく金融に関することが取り上げてあった気がする。

「知ってる。預金してるのが独裁者だろうと犯罪者だろうと、罪がきちんと立証されないと、情報を開示しないって奴だろ？」

スイスの銀行は、その長い歴史も相俟って多大な信頼を世界中から得ている。

特に有名なのはその商品の一つであるプライベートバンクだろう。スイスの厳格な銀行法に保証される高い守秘性と匿名性は余程の

事がない限り預金者の個人情報を守る。喩え、預金者が世間一般的には悪人に分類される人間であろうとも。

「ああ。加えて、スイス連邦同様、ヘルヴェティアそのものが高度な軍事力を持っているため、迂闊に手を出せば酷い事になる。

それに、あそこには地上から派遣されてきた数多くの国際機関の支部も存在する。そんな所に手を出せば世界中から孤立する」

地上でも多くの国際機関の本部やオフィスを抱えるスイスは、宇宙に置いてでも変わらない。多数の国際機関の宇宙支部を抱え、独自の存在感をプラントに示している。

「手を出せば火傷は酷く、武力で支配下に置いてでもメリットはない。宇宙であろうとも、スイス連邦はスイス連邦ってことか」

「ああ。…… ヘルヴェティア諸条約」

俺が短く纏めると、レイが同意した。

そのかわりに、今度は俺がレイに問題を出される。

「まだまだ知らない事が多いなあ…… かつて存在したジュネーヴ諸条約を宇宙圏でも適用するための条約群。締結はC・E・19年8月12日」

ヘルヴェティアでは、宇宙に関する多くの条約が締結された場所でもある。その中でも、ヘルヴェティア諸条約はとて有名だ。

ヘルヴェティア諸条約は、再構築戦争以前に存在したジュネーヴ諸条約と呼ばれるものを、戦後に生存圏を宇宙に広げた人類の為に改定したものだ。

内容は一言で括れば戦争犠牲者と文民――民間人の保護である。

第一条約は傷病者保護条約。戦地にある軍隊の傷者及び病者の状態の改善に関するもの。

第二条約は難船者保護条約。海上及び宇宙空間にある軍隊の傷者、病者及び難船者の状態の改善に関するもの。

第三条約は捕虜条約。捕虜の待遇に関するもの。

第四条約は文民条約。戦時における文民の保護に関するもの。

以上のC・E・19年8月12日に結ばれた4つの条約をまとめ

て、ヘルヴェティア諸条約という。C・E・43年には追加議定書による発展・補完も行われている。

地上では多くの国々が一応批准していたが、プラントはどうなのだろうか？

「ヘルヴェティア諸条約には、プラントも批准してたっけ？」

俺の問いにレイは首を横に振った。

「いや、していない。だが、一個の独立国となった手前、批准しないのもどうかという意見も評議会の中にはあるらしい」

その答えに俺は肩を落とした。

でも、批准への意見があるということは少なくとも、話し合いはされているということだろう。

俺の様な子供を俺自身が生み出す覚悟をしているとはいえ、やはり、俺のせいで傷つく人は少ない方が良い。民間人や捕虜への対応の方針は明確にしてみらいたい所だ。

「民間人保護や捕虜の扱いに関する条約もその中にあるし、批准しなくてはいいんだけど…… あ」

そうこうする間に、入学式の会場である大講堂についていた。

受付には既に多くの人が並んでいる。

「やっぱ、レイと一緒にいると時間が早く過ぎるな」

部屋から大講堂までそこその距離があるのにそれを全く感じなかった。

「そうだな。俺もここまで話していて時間を感じない相手は初めてだ。： 東アジア共和国」

俺達は会話を続けながら、受付の列に並んだ。

俺にとっても、一緒にいて時間を感じない、むしろ楽しいと思える同世代の友達 日本の幼馴染を除けばレイが初めてだ。

レイもそう思ってくれているようで嬉しかった。

「あ。それなら自信を持って答えられる」

だからこそ、レイに知ってもらいたい。俺が生まれた国の事を。そしてもっと色々教えてもらいたい。レイが育ったプラントのこ

とを。

士官学校の入学式は、地上の学校の入学式と殆ど変らなかった。ただ、俺達が一期生と言う事もあって、軍の偉い人達が沢山来ていることだけはなんとなく雰囲気であった。

特に、現プラント評議会議長ギルバート・デュランダルって人の訓辞は印象に残っている。

「我々は血のヴァレンタインの悲劇を忘れてはならない。しかし、それと同時に、我々が報復として行ったニュートロンジャマー散布が如何なる悲劇を地上に齎したかとも思い起こして欲しい。

我々コーディネイターは優れた知恵と身体能力を与えられ世に生み出された。その叡智は他者を傷つけるものではなく、ナチュラルと手を取り合い、人類全体を新たな時代へと導く為にこそ使われるべきだ。

今、プラントは新たな歴史を刻み始めた。

ザフトもまた、変わらなければならない。

このディセンベル士官学校は、プラントという国家の為の、軍事のスペシャリストを育成する事を目的とした学校だ。

その目的を達成する為に、多くの方々の協力を得て最高の環境を用意した自負している。

諸君、心して聞いて欲しい。

何故、この学校が工業用プラントであるアーモリーのいずれかの中に作られなかったのか。

見たまえ、この学校の周囲を。人々が行き交い、笑顔を交わし、穏やかな日々を営む姿を。

これが諸君が守るべきものだ。

この穏やかな日々を守る為に我々も諸君も存在する。

自らの守るべき者を常にその眼に入れ、その胸に高潔なる志の焰を灯し、諸君等には勉学に励んで欲しい。

プラントのために」

ふわふわとした長い黒髪に琥珀色の瞳をした年若い男だった。

時々、周囲にいるザフト軍人達が驚いたような雰囲気をしていた時があったから、きっと、訓辞の中には今までのザフトの中にはない新しい考えもあったのかもしれない。

けれども、俺にとってデュランダル議長の訓辞の内容は共感できるものだった。

穏やかで戦争のない日々の為に学ぶ。いつかできる大切なものの日々を守る力を得る。

デュランダル議長の訓辞を聞いて、俺はその決意を新たにした。

新入生代表の挨拶はレイがしていた。

名前が呼ばれた時は驚いたけど、レイなら代表になってもおかしくないと思った。

壇上に立つレイの姿は堂々として落ち着いていた。

あそこにいるのが俺の同室で、友達なのだと思うとなんだか嬉しかった。

入学式が終わると、それぞれの専攻に分かれてガイダンスを受けた。

俺とレイは勿論航宙科—— モビルスーツパイロットを養成する科のガイダンスを受ける。

勉強の内容や今後暫くの日程などを説明された。

明日は一日かけて身体検査をするようだ。明後日は身体能力検査をするらしい。

午後からは第三講堂で教科書の受け渡しが行われるという連絡を最後に、航宙科のガイダンスは終わった。

俺は隣にいるレイに話しかける。

「昼食食べに行かないか？」

「ああ」

食堂に向かう道中、食事ということもあって、会話の内容は食生活に関する事だった。

俺はディセンベル生活教練校に通っていた頃は食堂が無料ということもあり、節約の為に利用していた。

しかし、味の方はお世辞にも美味しいと言える物ではなかった。

士官学校の食堂も同様である。

教練校の食堂は無料だったが、士官学校の食堂は無料ではない。

俺の舌の為にも、節約の為に、できることならば自炊したい。

その話をした後、なかなかきつかけが掴めず、尋ねられなかったことをレイにきいてみることにした。プラントにずっといるレイならば、安く生鮮食品を売っている店を知っているのではないかと。

すると、レイは複雑そうに眉を寄せた。

「言にくい事なのだが……」

レイによると、プラントは食料の大半を地上からの輸入に頼っているという性質上、食品類の物価は総じて高く、その上、数も限られているので、生鮮食品を含めた食料品は基本的に配給制になっているのだという。

個人運営のレストランなど存在せず、外食産業はプラント政府の

直営になっているらしい。

安価な生鮮食品を販売している店もあるにはあるが、売っているのは基本的に配給にもレストランにも回せない粗悪品ばかり。

「それに、ここの食堂の料理のレベルは、プラントの未来を担う士官学生のための学校というのもあって、味も良く、美味しいと俺は思うが……」

あの、煮込みすぎてべちゃべちゃになった葉野菜や、揚げ際を見誤った脂っこい揚げ物や、硬すぎるパンが美味しい？

本気で言っているのかと、啞然として俺はレイを見る。

しかし、その顔は至って普通で、レイが俺をからかっている訳ではない事をまざまざと突き付ける。

驚きのあまりに立ち止まってしまった俺を置いて、レイはすたすたと食堂の発券機の前に並ぶ。

「シン？」

着いて来ない俺に気づいたのか、不思議そうにレイが振り返る。

俺は慌ててレイの傍に行き、昼食の券を購入する。

この数週間全品食べ比べて、味がマシだったメニューの一つ。

ビーフシチューセットだ。

「よくそれを食べているが飽きないのか？」

この所、俺はシチュー、ビーフシチュー、オートミールをローテーションで食べている。

飽きていないはずがない。

でも、食べるなら少しでも美味しいほうがいい。

「好きなんだよ。これが」

そう言って、俺はレイの手の中にある半券を見た。

フィッシュ&チップスセット。

うん。

粗悪品でも食べられないわけではない。だから店頭に並ぶのだから。う。

レイに生鮮食品を売っているお店を教えてください。

そして、レイに俺の料理を食べてもらうんだ。
うなれ。俺の家事スキル。

プラントの事を知りたいと思ったけど、こんなことは知りたくなかった。

「プラントの生鮮食品、なんとかならないのかなあ……」

ビーフシチューセットを完食し、俺はポツリと呟いた。

レイは優雅に食事を進めている。しかし、食べているのはフィッシュ&チップス。

「輸入に頼っている食品が自国で賄えるだけ生産できるようになれば話は別だろうが…… 当面は無理だろうな」

レイの言葉に俺は思い出した。

血のヴァレンタイン――

標的になったユニウス・セブンは農業用プラントだった。

「先々代と先代の議長―― シーゲル・クライン議長とパトリック・ザラ議長は、農業用プラントの再建よりも、兵力に増強に力を入れていた。それがデュランダル議長が仰っていた工業用プラント郡”アーモリー (Armory)” だ」

プラントのような大規模な建造物は一朝一夕でできるものではない。長期に渡る計画が必要だ。

けれど、確か、今朝見たニュースでは――

「でもアーモリーはトゥエンティまで作る計画を変更して、イレブンからを大規模な農業用プラントに転用するんだろ？」

部屋を出る直前、Le;Fleetで読んでいた記事にはそう書いてあった。

「ああ。工業用とはいえ、目的は殆ど軍事用だ。ユニウス条約との

兼ね合いもある。10基目まではもはや変更が効かない程に工程が進んでいたからな」

「11基目、12基目が外枠状態までだったからこそできる方向転換だっけ？」

プラントの現状を考えると、農業用プラントの増設は急務であり、利に叶っている。

しかし、外枠状態だったとはいえ、当初の目的とは正反対への方向転換にかかる経費は相当なものではないだろうか。かなりの反対もあったはずだ。

俺はそれを率直に言うと、レイは頷いた。

「デュランダル議長だからこそ出来る方向転換だ」

誇らしげに言うレイに、俺は先程の議長の姿と訓辞の内容を思い出す。

柔和で優しそうな人だった。

レイのどこか嬉しそうな顔に、デュランダル議長は支持される良い政治家なのかな、とぼんやり思った。

食事を終えると俺達は教科書の引渡し場所へ向かった。

航宙科は確か、第三講堂だったはずだ。

混雑する前に受け取りたいと、俺達は道を急いだ。

案の定、第三講堂に続く道は混雑していた。ざわつく人々は一応、列の体を成している。

俺は最後尾の場所取りをレイに任せると、どのくらい待つことになりそうか前の様子を見に行った。

一番前の様子は思っていたほど騒がしくなかった。とても静かな

もので肅々と第三講堂へと入っていく。俺はこっそり第三講堂の中を覗き込んだ。

「？」

首を傾げる。

みんな、教官らしき人物から小さな電子記憶媒体とそれを再生するLe;Fleetのような電子デバイスを受け取っているだけなのだ。

俺が知る教科書――紙媒体のものもあるにはあるのだが、その数は明らかに少ない。

そして、せっかくある紙媒体の教科書を選ぶ人も、俺が見た限りはいなかった。

「レイ、レイ」

俺はレイに確保してもらった場所に戻り、先程見た事を報告する。俺の報告に、レイの方が不思議そうな顔をした。

プラントでは紙製の本が貴重なのは知っていたが、どうやら紙そのものが貴重品らしい。

俺が見た小型電子記憶媒体の教科書は無料で配布のもので、傍にあった紙製の教科書にも同様の内容が書かれているが、有料でそこそ高値のものようだ。

「プラントの教育は基本的に、電子デバイスの教科書を用いている。教練校では――……」

レイが押し黙った。何か思い出したらしい。

「あそこは基本的に、地上から来た人間しか入校できない。

プラントに不慣れなコーディネイターの為の措置がいくつか採られていたはずだ。紙と電子、授業によって違ってはいなかったか？」

レイの言葉に俺は教練校での授業を思い返す。

「そういえば、紙の教科書と電子教科書を使った授業が半々だった様な……」

むしろ、俺にとっては普通である紙の教科書を使った授業の方が

多かった気がする。だからこそ、違和感なく教練校の授業に馴染めたのだ。

電子教科書での授業は物珍しさも相俟ってとても興味深く受けていたはずだ。

「どうする？ シン」

はっ、と我に返る。気がつけば俺達の番が来ていたらしい。

紙製の教科書の方を見る。そこそこの値段。小型電子記憶媒体が無料なのを考えると、割高だ。

しかし――

俺はポケットからカードを取り出す。

「両方ください」

お金もかかる上に大荷物にもなるが、不慣れなものを使うよりはいいだろう。併用するのも悪くないはずだ。

俺に付き合ってくれたのか、レイも紙製と電子、両方を受け取っていた。

ついでに販売していた紙製のノートも大量購入しておいた。

プラスチックの頑丈そうな袋に入れられた教科書とノートはかなりの重量だった。

物珍しげに俺達を見る教官や同期の視線に顔を見合わせる。互いに苦笑すると、俺達は一路、部屋へと戻った。

「なあ、レイはこの後何かあるのか？」

部屋に戻り、教科書を整理し終えると俺はレイに尋ねた。この後は自由時間だ。

「ああ。俺は――…… 家族とすこす為に合流することになってい
る」

その言葉に俺はほっと胸を撫で下ろした。

「俺もアルバイトの顔合わせがあるんだ」

「アルバイト？」

いぶかしむレイに俺は頷いた。

「ああ。俺が工業用モビルスーツの運用資格を持つてるのは知ってるだろ？ 学校側が推奨してるアルバイトに、デブリ回収や外壁修理のアルバイトがあったんだ。そこに行つて来る」

「なるほど。確かに俺達モビルスーツパイロットを目指す航宙科の人間には願つてもないアルバイトだな。モビルスーツの搭乗時間は少なくて困ることはない」

「だろ？」

納得した面持ちのレイに俺は頼んだ。

「この後すぐに出ないと間に合わないんだ。だから、俺のアドレスにメールしておいてくれないか？ ほら。昼食前に言つてた生鮮食品を売つてる店」

俺は携帯を取り出し、レイに見せる。

「わかった。車での移動時間もある。その時に送る」

「さんきゅ！ レイ」

これでまずいメシから解放される。思い余つて、俺はレイに抱きつく。

すぐに離れると、俺は入り口へと駆ける。

ボタンを押し、扉をスライドさせると俺はレイに声をかける。

「それじゃあな、レイ。家族と良い時間を」

その言葉が言い終わるのと同時に扉は閉まった。

上機嫌で、俺はアルバイト先へ向かった。

n
e
x
t

?

?

入学式翌日。

少し早めに起きて、俺は冷蔵庫を覗き込む。

昨日まではバランス栄養食品とかミネラルウォーターしか入っていないかったそこには、たくさん野菜と少しの肉や魚が収まっていた。

込み上げた何かに、俺は息を詰め、静かに吐き出した。
使う物をいくつか取り出し、まな板に載せる。

料理のレパートリーはそんなにもっていないけど、基本だけは叩きこまれている。材料の関係で、流石に日本風の朝食は無理だろうけど、パンをメインにした朝食ならできるはず。

うし、と一息気合を入れて、俺は食材に手をつけた。

初めて一人で作った朝食の内容は、パンとオニオンスープ、焼いたベーコンと、ニンジンやブロッコリーの温野菜という簡素なものだった。

丁度できた辺りでレイも起きてきたので、ついでに一緒に食事をとった。表情は相変わらずだったけど、食事をする手がいつもよりも早かったのを俺は見逃さなかった。

レシピはインターネットにある。もっとレパートリーを増やそうと俺は決意を新たにした。

朝食が終わった後、コーヒを飲んで一息入れた後、俺達は身体検査に向かった。

今日は一日かけて身体検査が行われる。

午前中は身長や体重、座高や視力、聴力や血圧などの検査が、午後からはCTスキャンや胸部X線検査、血液検査やナノマシン薬物検査などが行われる予定だ。

日本で言う人間ドックみたいなものなのだろう。

そういえばバリウムを飲むのが辛いつて言ってたっけ。バリウムってなんだろう？

制服で身体検査を受けるわけにもいかなないので、更衣室で運動着に着替える。

ちらりと着替えるレイの体を見れば、しっかりとした体格が目に入る。

「前から思ってたけど、レイって何か体を鍛えてたりするのか？良い筋肉だよな」

同室ということもあって、レイの体を見る機会は何度かあった。着痩せするタイプらしく、服の下には均整のとれたいい体が存在していた。顔がキレイなタイプだった為に、はじめて見た時はかなり意外に思った。

「ああ。幼い頃は体があまり丈夫ではなくな。ある程度の運動はしていた」

ある程度、か……けれど、あの筋肉の付き具合からして、随分鍛えている事が伺える。

「あ。それ、俺も同じ。俺もちっちゃい頃は体が丈夫でなくてさ」

レイも俺と同じような理由で体を鍛えていた事になったか親近感を覚えた。まあ、俺の場合は厳密に言うとは違ふのだが。

「鍛えているのか？ それにしては――」

レイの視線が上下し、俺の体を見る。

「見るな。言うな。俺、なんか筋肉付きにくい体質みたいなんだ……」

自分の体の貧相さは自覚している。肌の白さも相俟ってか、細い体が余計に細く見えるのだ。それに、最近戻っては来ているものの、体重も以前よりは大分落ちている。諸々の要因があるとはいえ、俺の体格が貧相である事実は少しも変わらない。

しげしげと、俺と自分の体を見比べるレイの腹に軽くパンチを入れる。

「もう着替えただろ。さっさといくぞ」

士官学生全体が動いているということもあって、どの検査もかなり込んでいた。

身長測定に続く長蛇の列を見た時は、これで本当に検査が1日で終わるのかと思ったが、なんとか午前中の工程は終わった。

中庭でレイと一緒に昼食をとる。

作ったのはホットドッグとサンドイッチ、ついによく磨いたリング（皮有り）も持ってきた。俺達は育ち盛りなので、とりあえず量と栄養が欲しかった。

ホットドッグとサンドイッチには結構な量の野菜を入れ、量と栄養バランスをとる。

肉が欲しい所だが、生肉や肉類の加工食品は全体的に高いのだ。

昨日の俺の手持ちでは、薄切りベーコンを買うので精一杯だった。

しかし、上手くやりくりしないとあつという間に教練校時代に節約して貯めたお金がなくなりそうだ。

俺の家のメインバンク——葦原銀行の預金に手をつけなければならぬ日があるかもしれない。

いや、あの預金は使わない。銀行の預金は一気に増えたが、あそこのお金は使いたくない。士官学校の学費は仕方なくそこから出しているが、それ以外ではあそこからお金は出したくない。

昨日始まったばかりのアルバイトだが、今から給料日が待ち遠し

い。

外装修理やデブリ回収のアルバイトは歩合制の給料体系をとっている所も多い。その例に漏れず、士官学校が斡旋するアルバイト先も歩合制だった。

勉強を蔑にしない程度に、アルバイトに精を出そうと思う。

そんな事を考えながら例の如く、レイと互いに問題を出し合いながら昼食を食べた。

俺がぼんやりしてる時に、レイが俺のサンドイッチを1つ誘拐していった。

ツナ味……

気に入ったのなら、欲しいって言ってくれればいいのに。やるかやらないかは別だけどな。

「はあ…… 慣れないなあ……」

そう言いながら、俺は注射された左腕をさすった。

体中がざわざわして何処か落ち着かない。

それも当然だろう。今、俺の中には沢山のナノマシンが入って、体内の検査をしているのだ。

「こればかりは慣れろとしか言えないな」

レイには既に経験があるのだろう。涼しい顔をしている。

なんでこんな検査をしているのか不思議に思っていると、レイが教えてくれた。

このナノマシンによる体内検査は、連合からのスパイ対策に行われるらしい。

連合の薬物に関する技術はプラントの先を行っている。その技術を用いて、特殊な薬物でナチュラルの身体能力を強化しているのは

有名な話しだ。

士官学校開設を聞き付け、コーディネイターに偽装し、身体検査当日に薬物反応が出ない様に調整された強化人間がスパイとして紛れ込んでいる可能性もある。

しかし、強化人間は長期間特殊な薬物を摂取しないと、身体機能や精神に異常を来してしまう。身体検査が終了するとすぐに、薬物を摂取しなければ異常が表面化し、スパイとしての任務が果たせなくなるのだ。

その為、体内の成分の動向を調べるナノマシンがある程度の期間、人体に注入されるのだ。

その間ナノマシンは体内の成分情報を収集する。ナノマシン回収後の分析で、特殊な薬物が体内にあったという記録が出てきた場合は拘束となる訳だ。

「回収は12日だ。その時に特殊な機械を肌に当て、ナノマシンを一カ所に集め、献血の要領で回収する」

「ふーん…」

めんどくさいし、気持ち悪い。このざわざわした感じが一週間以上も続くかと思うとげんなりした。

俺は肩を落とした。

「身体検査、これで全部終わりだよな？」

「ああ。夕食を作るにはいい時間だ」

レイ肯定の言葉に安堵の息を零す。

一日中他人に体を色々されて本当に疲れた。

さりげなくされた夕食の催促に、冷蔵庫の中身を反芻する。

今日はバイトもないし、少し豪華なものを作ろうかな。レシピを調べてみよう。

そうつらつら考えながら俺達は寮に向かう。道中、俺が思っていた以上に体は疲れていたのか、何度か人にぶつかってしまった。

なんか、ふんどりけったりだ。料理を作って、気を紛らわせよう。

身体検査、その翌日の身体能力検査から数日経った。

最近、俺の周りで妙な事が起きるようになっていた。

よく人とぶつかるのだ。なぜか。

最初は俺の不注意かと思ったが、よくよくぶつかった人の顔を見れば、何度か同じ人物とぶつかっている。この広い学校の中で同じ人物と何度も鉢合わせるなんてことは、現実にはあり得るのだろうか。あまり高い確率で起きる事とは思えない。

それに、ナノマシンのざわざわした感じは何日経っても慣れない。あと2日の我慢だと自分に言い聞かせてはいるものの、この自己暗示もそろそろ限界だ。早く今日が終わって明日になって、明日が終わって明後日になれば良い。

けれど、いくら俺がナノマシンのせいで憂鬱になっても、本格的に始まった講義は受けなければならない。

次のプログラミングの講義で今日のカリキュラムは終わる。

あとは、バイトに行く時間になるまでレイとシミュレーターで対戦する予定だ。

この後の楽しい事に無理矢理想いを馳せながら、俺はレイと一緒にパソコンのあるC301教室へと向かった。

C301教室に着くと、授業があるということもあって、既にそこそこ人が来ている。

大きな机に4台ずつ設置されたデスクトップパソコンが5列、整然と並ぶ様はなかなか見応えがあった。

「この授業、座席指定だっけ？」

人で埋まり始めた教室に、俺はレイに尋ねた。

「いや、この授業は自由だったはずだ」

その言葉を聞いて、俺は教官の講義が聞きやすそうな席はどの辺りなのか教室を見渡した。

「えーと…」

しかし、なかなか良さそうな位置が見つからない。

「急がないと人が増えるぞ」

はっと気付けば、人がだいたいぶ増えている。

俺はレイの手を引いて、慌てて適当に選んだ席に座った。

「あ」

席に着いたあと、俺は気付いた。

しくじった。隣が女の子だ。

しかも、この紅い特徴的な髪には見覚えがある。

廊下でぶつかったことがある子の一人だ。この子とは確か、二度程ぶつかったていたはずだ。

一度目は一昨日、廊下を歩いていると何故かぶつかった。二度目は昨日、廊下の角で鉢合わせて危うくお互い転ぶ所だった。

本人は覚えていないだろうが、俺は気まずい。

廊下側のレイに席が変わってもらおうかと思ったが、既に講義は始まっている。交代は不可能だ。

しかたないと俺は諦め、講義の内容に没頭した。

今日はプログラミング授業1時目ということもあり、もっとも基本的なプログラム”Hello world.”を作る事になった。プログラミングは教練校にいた時の授業やモバイルスツシュミレーターのOSを自分用に改造したりする際に勉強している。きちんと講義を受けていれば、少なくともおいて行かれることはないだろう。

”Hello world.”を手早く完成させると、ちらりとレイの方を見た。

あ、こいつ、課題終わらせてシュミレーターのOS弄ってる。

涼しい顔をして堂々に行われているサボりに、俺は軽く敬意を抱

く。

次の休み時間は、モビルスーツシュミレーターで一戦交える事になっている。レイに勝ち越しているのもあって、負けたくなかった。俺もレイに習って、OSを弄る事にした。

こっそり鞆から大容量の小型メモリーを取り出し、パソコンに接続する。

俺のOSの目下の目的は、射撃性能と回避性能のアップ。スパゲッティみたいになってるOSを一旦紐解き、整理していく作業はなかなか楽しい。

「おねえちゃん、そこ違うよ」

「ええ!？」

隣から小声の会話が聞こえてきた。

どうやら隣の子とその隣は姉妹らしい。

隣の子は慌ただしく電子教科書とディスプレイを並べ、見比べている。

だが、間に合うだろうか。

そろそろ――

「そろそろ作ったものを提出してもらおうぞ」

やっぱり。

教官からの指示が全体に告げられる。

俺は改造したOSを保存すると、サボりの証拠を隠滅し、作ったプログラムを送信する。

これで俺は大丈夫だ。

「ああ、もう!なんでエラーになるのよ!!!」

「おねえちゃん、落ち着いて!!」

隣の子はまだ間違いを見つけられていないらしい。

困り果てた妹らしき少女の声に、俺は隣のディスプレイを覗き込む。

「こことここ、スペルミス。あと、この辺り、構文そのものがまちがってる」

思わずディスプレイを指差し、口に出してしまう。

隣の子は驚いた色をそのアメジストの様に濃い紫色をした瞳にのせて俺を見て来る。

時間は残り少ない。

「貸して」

キーボードを引っ張り、素早く間違いを修正する。

「これで大丈夫だ。送信はできるだろ？」

「え？ あ、うん」

頷くのを見て、俺はキーボードを返した。

「あ、ありがとう」

「…… どういたしまして」

キーボードに手を置き、パソコンに向き合ったのを見届けると、俺も机に向き直り、自分の教科書をまとめて鞆の中に入れる。

「シン。送信が終わった者から帰って良いそうだ」

そう言ったレイも既に教科書をまとめて、帰る準備を終えていた。
「わかった」

俺の言葉にレイが頷き、立ち上がる。

シュミレータールームへ向かうレイの後に続こうと俺も立ち上がった。

「あ！」

横から聞こえてきた声に、俺は隣を見る。

どうやら無事に送信を終えたらしい。しかし、隣の子は何故か俺の方を向いている。

どうしたのだろうか、と俺は首を傾げる。

隣の子は何か言いたげにしているが、なかなか切り出してこない。このままではレイに置いて行かれる。困った俺は、とりあえず思った事を告げてレイの後を追うことにした。

「あんまり妹を困らせるなよ」

「え？」

俺は鞆を持ち上げ、その場を後にした。

先に行っていたレイになんとか追い付き、俺は安堵の息を零した。

「遅かったな、シン。どうかしたのか？」

少し遅れた俺を気にして、レイが声をかけてくる。

「いや、うん……　なんか最近、よく人とぶつかったりしてさ……」

首を横に振り、俺は最近起こる現象をレイに報告する。

「人も多いし、ぶつかったりすること自体はおかしくないんだろうけど、頻度がおかしいんだ。ここ一週間の内、同じ人とぶつかったり、角で鉢合わせたりすることが何度もあったんだ。しまいには、まっすぐの見通しのいい廊下でもぶつかったりするし……　なんなんだよ、もう」

最後の方は愚痴になってしまった。

心底、鬱陶しかったのだ。

俺の方からぶつかったようなものののに、何故か相手に平謝りされた揚句、俺が声をかける前に脱兎の如く逃げられる。中には悲鳴を上げて俺から逃げてく奴もいた。

一体何なんだ。

「お前と言う人間は、その……　奇運な人間だな」

その言葉に、俺はレイの方を見る。まるで珍獣を見る様な、興味深そうな目でレイは俺を見ていた。

「それは恐らく、”ナノマシン共鳴現象”だ」

「”ナノマシン共鳴現象”？」

レイが頷く。

「中枢ナノマシン同士の間で極稀に起こる現象だ。ナノマシンは独自の周波数でネットワークを形成し、各個の情報を全体共有している。その中心になるのが中枢ナノマシンだ。中枢ナノマシンは常に他ナノマシンとリンクし、これを監視、制御している。その際には特殊な周波数の電波が用いられる」

ナノマシンに関しては、一応教練校でも話しは聞いたが、あくまでプラントでの一般常識程度だ。医療用ナノマシンの詳細なんて俺が知るはずもないし、それがどのようなシステムで動いているかもさっぱりだ。

でも、今、俺の中には得体のしれない電波を発するナノマシンが数え切れないほど入っている。

そう思うと鳥肌が立った。

「その電波って、人体に無害なのか？」

思わず、レイの話しの腰を折ってしまう。

「有害ならば、今、俺達の体の中に入れられていない」

レイは気にせず俺の懸念をあっさりと否定した。

「お前の身に起こっているのは、この中枢ナノマシンが発する特殊な電波が、極稀に近くの中枢ナノマシンと共鳴して起こる”ナノマシン共鳴現象”だ。」

聞きなれない言葉に、俺は首を傾げる。

だが、聞きなれない現象が俺の身の中では起こっているのだ。理由は何だろうか？

「原因は？」

「はつきりしたことはわかっていないが、自身が統率するナノマシンに近い周波数を持つ中枢ナノマシンとデータを共有しようとして起こる現象らしい。」

顕著な症状としては、今のお前の様に、よく人にぶつかったりす

るようになる。正確には、お前の中にある中枢ナノマシンに近い周波数に近い中枢ナノマシンを持った人間にな。

この現象は同会社同工場同日同時同生産ラインで製造された中枢ナノマシン間で起こりやすいというがはっきりしていない。

それに、ナノマシンが発する電波は人間の行動に影響を与える程強力ではなく、本当に微細なものだ。」

レイからの返答を簡略にすると恐らく、原因不明だろう。

俺にもわかりやすく、かなり噛み砕いて教えてくれているのだろうが、やっぱりよくわからない。

けれど、ナノマシンが人の行動に影響を与えるものではないのはわかった。

ならばなぜ。

「ならなんで俺はあんなに人にぶつかってるんだよ」

思わず口に出してしまった言葉を、レイは正確に汲み上げる。

「はつきりとわかっていないと言っているだろう。一説には、ナノマシンと相性の良い人間に起こるのではと言われているが、その相性が良い人間の特徴—— 発現した人間に見られる共通した遺伝子配列や体質などが見出されず、全く分かっていない。

…… あまり気にするな。もうじきナノマシンも回収される。そうすれば”ナノマシン共鳴現象”はなくなるはずだ」

俺がかなり憂鬱になっていることを察してくれたのだろう。レイはそう言って、俺の目の前に小型メモリーを見せつける。

「今日は負けん。とことん付き合ってもらうぞ」

はっと気付けば、俺達は既にモビルスーツシミュレータールームまで来ていた。

呆ける俺を見て、レイは何故か肩を竦めた。

「それとも、部屋に戻って休むか？ その場合は、お前の不戦敗になるぞ」

レイに挑発に、俺の気力が戻ってくる。

「誰が休むって言ったんだ？ 今日もこてんぱんにしてやるよ」

そう言った俺を見て、レイは満足そうに頷いた。

「ああ。今度こそ負けない」

お互いに睨みあいながら、俺達はシミュレータールームの扉をくぐった。

後日、ナノマシンが回収されると、俺が頻繁に人にぶつかることもなくなった。やっぱりアレはナノマシンのせいだったらしい。

その事をレイに報告すると、安心した様に笑って、よかったな、と言ってくれた。

振り返れば、体に悪影響もないし、気にしすぎなだけだったのに、俺の愚痴を聞いてくれたレイには感謝の念は絶えない。俺には本当にもったいない友達だ。

お礼に俺も、シュミレーターとの対戦ではレイの隙を尽く突いてこてんぱんにさせてもらった。きっとレイなら、その次の時にはもっと凄くなって挑んでくるんだろうな。

絶対に負けたくない。

ツナ味の恨み思い知れ。

それにしても、ナノマシン共鳴現象とか、なんでレイはあんなこと知ってたんだろ？

n e x t

?

?

人類の戦争は、常に技術の発展と共にあった。
その最大の功罪は遠距離武器の発明と発展だろう。

暗闇の中、俺はそんな事を考える。

両手で持ったモノは重く、見えていなくても鮮明に、脳裏にその姿を思い浮かべることが出来る。

ゆっくりと息を吐き、静かに目を開ける。

透明なバイザーに視界は覆われ、約15m先には丸い小さな物的、そしていくつかの器具。

鼓膜の保護も兼ねたヘッドホンから、教官の指示が飛ぶ。その指示に従い、俺は両腕を持ち上げた。

視界に入る、黒光るそれは簡単に命を奪うことのできる武器。

ズシリと重いその安全装置を外し、合図を待つ。

思考が冷えていく。

俺の世界から音がなくなる。

遠くで、開始を告げる合図を聞いた気がした。

*

ヘッドホンとバイザーを外し、俺は一息ついた。持っていたモノを台に置き、視線を先程撃ち抜いていたモノ達にやる。

人型的――

俺の記憶が正しければ、現れた的――人型は20体。その内、

2つ狙いを外したはずだ。

俺が狙ったのは2カ所。頭部と、左胸部― 即ち、心臓である。

ひい、ふう…… ああ、やっぱり。

一つ目が左鎖骨、二つ目が左肩を撃ち抜いている。

レイは全弾あの2カ所を撃ち抜いていた。

もっと練習しなければ、と俺は溜め息を吐いた。

ブースから出ると、教官が俺の背を叩く。

的にあてるのも困難な者が多い中、的に全弾命中させた者はとても褒められていた。俺もその例に漏れず、よくやったと褒められる。

振り返れば、頭部や胸部を撃ち抜かれた人型の的。

狙いを外し、鎖骨や肩を撃ち抜かれた人型の的。

嬉しくはなかった。

足りない。

全然足りない。

身を締めるノーマルスーツ。

目を閉じ、暗闇に身を置く。

メインカメラの映像を映す大きなメインモニター。

それに重なる様に敵機の捕捉や装備兵器の状態を投影する透明な

ディスプレイ。

水平儀、速度計、昇降計、高度計を表示するサブモニター。

エンジン回転数や燃料流量、電気・油圧・燃料の各系統及び機体

内気圧に異常がないかを監視し状態を表示するモニター。

緊急時に機体のOSに手を加える為のキーボード。

挙げればきりが無い各計器の位置や役割を脳裏に描く。

脳内にもコックピットを作りだし終えると、ゆっくりと目を開け、

現実と脳内の光景を合わせる。ピッタリ、と寸部違わず重なり合う。それを確認すると、右手、左手、両手に操縦桿の感触がある事を確かめる。

フットペダルを軽く踏み、その反発に息を吐く。湿った空気が唇に返ってくる。

喉元に、耳に感じる異物感にはようやく慣れた。小さな器具で無線でのやり取りが出来ると言うのだから凄い。

教官の声がイヤホン――通信機を通じて聞こえて来る。

メインモニターは静かにメインカメラが見る光景を映す。

漆黒の闇。

点在する小惑星群。

巨大な砂時計の壁面。

通信機から伝わってくる声は、カウントダウンを始める。

《5》

《4》

《3》

《2》

《1》

《演習開始》

フットペダルを一気に踏み込む。反作用が生み出す負荷が体に押し掛る。

俺は、開始位置である小惑星の陰から一気に躍り出た。

スラスターの出力が最大にまで上がったのが視界の端で確認でき

る。

宇宙空間には上も下もない。

左斜め45度。バーニアを吹かし一気に方向転換。

案の定、どう動いたらいいいのかわからない敵機が複数捕捉できる。

ロックオン。

敢えて俺が姿を晒したことにより、一気に視線が集まる。

戸惑いが過分に混じる敵意。

ロックオンされる前に討ち取る。

ライフルの引き金を引く。

放つ弾は4発。

3機のコクピットが赤に塗れる。

1機避けられた。俺は思わず舌打ちする。

直後。

警告音が鳴り、こちらがロックオンされていることが分かる。

瞬時にバーニアを最大出力までふかし、体にかかる負荷さえも無視して方向転換を図る。

天地が入れ換わる。

そしてそのまま、逆探知を行ったシステムが示す敵機の場所に向かってスラスターを最大出力にして迫った。

「う、うわああああ！！　くるなっ！　くるなっ！」

通信機越しに聞こえてくる声。

狙いが定まらず、ばら撒かれる弾。

バーニアで方向を微調整しながら全て避ける。

一部避け切れないものは、行動不能にならない位置に被弾させる。更にフットペダルを踏み込み、スラスター、バーニア共に最大出力にして一気に距離を詰める。

接近。

左腕を突きだし、敵機の胸倉辺りに打ち込む。そのままの勢いで

小惑星に押さえ付けると同時に、ライフルの銃口をコックピットに当てる。

コックピットは赤に塗れた。

演習終了を告げる教官の声が通信機越しに聞こえる。

ペイント弾を用いた実戦形式の演習。5機でのバトルロイヤル。実機のモビルスーツに乗り初めて1週間ない士官学生に出される、無茶振りとしか言えない内容である。

それでも中には、その演習をこなしてしまう者もいるのだ。幸いにも、俺もそのこなしてしまう者の一人になれたようだ。

勿論、レイもその一人だ。レイは既にこの演習を終えている。

俺にはレイのように、小惑星を利用した同士討ちの誘発なんてことはできない。攻め込んで、自分自身の手で終わらせる。ただそれだけだ。

教官の帰投命令に従い、俺達は士官学生専用のドックに向かう。

その途中、俺の乗るジンのメインカメラの端に赤が映る。

思わず目を見開き凝視する。

それは流れ弾が当たり、ペンキに塗れた小惑星だった。

今回の演習に利用されたのは害のないペイント弾である。

これがもし実弾だったら。

小惑星が民間人の乗った船だったら。

そう思うとぞっとした。

ビーム兵器は―― 遠距離兵器は嫌いだ。

機械の補助があっても、当たるかどうかは力量次第。

当たったことがはっきりと確認できる時と出来ない時がある。そのくせ、目標を外し、流れた先で甚大な被害を出す。兵器としては、これ以上効率の良いモノもないだろう。人類の戦争の歴史を振

り返れば、遠距離兵器が主兵装になるのも頷ける。

ましてや、フェイズシフト装甲の存在により、実体兵器がほぼ意味を成さなくなった昨今、遠距離ビーム兵器が重宝されるのも仕方がないのかもしれない。

モビルスーツ乗りになる以上、遠距離ビーム兵器は避けて通れない。

だからこそ、俺は必中を誓う。

そして確実に仕留める。

悪足掻きなんてさせない。放たれた攻撃の先に、誰もいないなんて保証はないのだ。

コクピットを必ず狙い、撃ち抜く。

一発も誤射がないように。

一発の流れ弾も出さないように。

必中必殺――

でも――

ドックに戻り、俺は機体を所定の位置に戻す。

機体の異常をチェックした後、ヘルメットを脱ぐ。

少し息苦しい。

ハッチを開けると、新鮮な空気が流れ込んでくる。

大きく息を吸い、ゆっくりと吐く。

首を詰めるスーツの器具を外してゆるめると、ようやく人心地つ

いた気分になる。

「お疲れ様——」

小さく、俺を乗せてくれたジンにお礼を言う。

暫く目を閉じて深呼吸を繰り返し、俺はハンガーへと降りることにした。

アンカーに足をかけ作動させれば、ゆっくりと視界が下がって行く。

少し目線を降ろせば、一塊りに待機する航宙科の同期達の姿が見える。その中から何故か、レイが静かに歩み寄って来ていた。

けれど、俺の脳裏を占めるのは、先程見た、赤に塗れた小惑星だった。

瞬間。オーブで見たあの光景が重なる。

焦燥が、どうしようもない渴きが、俺を襲う。

「シン」

レイが短く、俺の名前を呼ぶ。

返事をしなければと、俺は言葉を紡ぐ。

「レイ」

短く呼んだ名前。

焦燥は、渴きはやまない。

足りない。

何もかもが、全然足りない。

「付き合ってくれ」

からからに乾いた俺の口は、上手く言葉を紡いでいるだろうか。

「ああ、足りないんだろう？」

どうやらレイは、俺の言いたい事を正確に察してくれたらしい。

「もっと射撃の精度を上げたいんだ。どうすればいいと思う？」

「そうだな、射撃の訓練やシミュレーターは基本として…… 動体視力を鍛えてみてはどうだ？ 訓練法があったはずだ」

レイと出会ってまだ1ヵ月程度しか経っていない。それにも関わらず、何故かレイは俺を分かってくれる。それが嬉しくて堪らない。

「帰ったら教えてくれ。それにしても、機体のロックオンの精度が甘かった気がするんだけど、レイはどうしてるんだ？」

「OSを多少弄ったが… 詳しい事は理工科の人間に聞いた方がいいだろう。そもそも、士官学生に割り当てられている機体は退役した旧式ばかりだ。最新の機体に比べると機能的には劣る。ロックオンの精度が甘いのも致し方ない」

ふむ、と俺は考え込む。

「俺達、理工科に知り合いいないからなあ。うーん… なら、今の機体で照準が合わせられるようになれば、最新の機体での照準合わせが楽になるのか…?」

「は？」

馬鹿な事を言うな、とレイに小突かれる。

「そろそろ列に加わらないと、教官に起こられるぞ」

そう言って、レイは教官達がいる方を示す。

ごほん、と一つ。教官が咳払いをした。

演習は俺がいる組で最後のはずだ。俺が、急いで戻らないとみんなが帰れない。今更ながら、俺はそれを思い出した。

俺達は慌てて、列に加わる為に走り出す。

走りながら、ぼんやりと俺は思う。

近接武器が欲しい。

刀でも剣でも良い。相手に確実に当たったと分かる武器が。

手元に戻ってくる武器が欲しい。

どんな形のものでいい。狙いを外しても、周囲に被害を出さない武器が。

無理な夢想だ、と俺は自嘲する。

それでも。誰かのあの光景を俺自身が作りだす覚悟をしていても、

それでもなお、俺は願ってしまふ。

俺が殺すのは、軍人だけでいい。

n
e
x
t

？
(後書き)

初めて戦闘描写へのご意見・ご感想をお待ちしています。

？

？

つい、と画面に指を滑らせる。同時にページが送られ、文章の続きが現れる。

最初の頃は違和感のあった動作も、随分慣れたものだ。表示された文を読みながら、ふと、そう思った。

顔をあげて時計を見る。まだまだ時間はある。

俺は再び、手の中の電子書籍へと視線を落とした。

今日は、俺達士官学生にとってとても重要な日だ。

これから約1年を通して苦楽を共にする実習班のメンバーが発表される。

しかも、予めメンバーの名前が通達される訳ではない。各個のパソコンに集合場所が送られ、そこで初めてメンバーを知るという形式だ。

先週の実戦形式の演習はその班を決める為のテストでもあった、らしい。教官が演習の後に言っていた。

集合時間は一律午前11時。

今日一日は班の相互理解を促進する為に講義はなしとなっている。相互理解が深まれば、連携も取りやすくなるだろうと教官はぼやいていた。

その言葉を耳にして、ふと、俺が最初にザフトという軍に抱いた印象を思い出す。

個々の能力に絶対的な自信を持ち、前線の兵士に幅広い判断を任せている。悪く言えば、個人プレーや独断専行を容認しているとも言えるだろう。他の兵士との連携などあまり重視されていないのかもしれない。もしか、自軍の戦艦との連携も視野に入れていないの

だろうか。それは流石にないだろう。うん。

今回の班分けは科を跨いで編成される。

一つ目は勿論、モビルスーツパイロットを育成する航宙科である。人数は3人。

three-man cellという奴だ。作戦行動中の役割分担や死角のカヴァーは勿論、それ以前の状況分析や作戦立案の際にも3人目の存在は重要だ。2人ならば偏りが出てしまうかもしれないが、3人目がいれば異なった視点での分析も生まれて来る。

だからこそ、three-man cellなのだろう。

2つ目はモビルスーツの整備を行う理工科だ。

今回の班分け以降、太っ腹にも士官学校では、一人に一機、演習用のモビルスーツを分配するらしい。

その整備を担うのが、理工科の2人だ。

主に機体や兵装などのハードウェア、OSなどのシステム周りのソフトウェアを整備する者がそれぞれ1人づつ着く。ソフトウェア担当はともかく、ハードウェア担当は一人でこなすには流石に無理があるので、整備担当に混じっての実習になるらしい。

3つ目は戦況や情報の伝達を行う情報科。

モビルスーツの発着や、戦況や命令の伝達、パイロット側からはわかりにくい、戦場全体の俯瞰などを教えてくれる重要なポジションだ。これが1人。

以上の一班6人の編成でこの1年を過ごすことになる。

俺は電子書籍のページを送る。

今読んでいる本はいわゆるコミュニケーションのハウツー本である。

先日の中ノマシン共鳴現象事件の時といい、俺はどうもレイ以外の他の同期からは何故か距離を置かれているらしいことに気づいた。同年代は何故か俺に近づいてこない。思い返せば、レイ以外とともに会話した記憶がない。教官とアルバイト先の人達は別だけど。

やはり、この無表情がダメなのだろうかと悩んでいた時に、目に入ったのがC B出版から出ている『擬似人格のすすめ』という本だ。電子書籍ストアの新着に並んでいたこの本の紹介に仏頂面・無愛想・不器用の三重苦なあなたにおススメ！と書かれていたので、ついつい目を惹かれて購入してしまった。

ついでなのでレイにも薦めておいた。不器用はともかく、お互いに無愛想なのは自覚している。

だからこそ、俺は少し準備もしたのだ。ちらり、とレイを見る。

レイも俺と同じように電子書籍を読んでいた。

そのまま視線を移動させて時計を見る。もうそろそろ移動した方がいいだろう。

そう思って、俺は現在のページにしおりをはさみ、電子書籍の電源を落とした。

荷物を持ち、何も言わずに立ち上がる。

立ち上がった俺を見て、レイも電子書籍の電源を落として立ち上がった。

「行くのか？」

「ああ」

その言葉を肯定して、俺はレイと共に部屋を出た。

*

同じように角を曲がり、同じ道を歩く。

「ついてくるなよ」

「そちらこそ」

そんな軽口を交わしながらもきつと、お互いに同じ事を願っているんだろう。

最後の角を曲がる。この先には小教室がいくつか並んでいる。

集合場所は、その中でも真ん中から少し過ぎた所にある小教室だ。

俺は足を止める。

レイの足も――止まった。

「なあ、レイ。そろそろお互いの集場所言おうぜ」

努めて平坦に、弾む心を宥めて、レイに話しかける。

「ああ」

レイも俺を見て、俺達は同時に口を開く。

「D207小教室」

俺達は互いの腕を交差させ、ぶつけあった。

「やったな！」

「ああ！」

いくつかの班に分けると聞いた時からずっと、レイと同じ班になれればいいと思っていた。それでは何も変わらないじゃないかと思う反面、気の置けない友達と一緒に切磋琢磨したいという想いの方が強かった。

だから嬉しい。レイと一緒にの班になれて。

D207小教室の扉をレイと共に見る。この中には、俺達の班のメンバーがいる。

「えーっと：第一印象が大事なんだよな。ここは明るく、こんにちはーって言いながら飛び込んだ方が良いのかな？」

さっきまで読んでいた本の内容を思い出しながら提案してみる。

「いや、ここは主導権を握る為にも、インパクトを重視した方が良いだろう。あの本ではたしか：”チョリース☆”だったか？」

『擬似人格のすすめ』にインパクト特大☆と書かれていたアレか：薦めた時は微妙な顔をしていたけど、なんだかんだでレイも読んでくれたのか。

「満面の笑顔で言うんだよな：レイ、俺、笑ってるか？」

俺は笑顔を作って、レイに見せてみる。

「……大丈夫だ。重要なのは仲良くなりたいたいと言う心だと書かれ

ていた」

間と返答が気になる所だが、大丈夫なのだろう、…… たぶん。大丈夫だと信じたい。

「扉が開くと同時に飛び込むぞ」

レイが扉のスイッチに手をかける。

俺は静かに頷く。

扉が――開いた。

「「チョリース☆」」

「レイ・ザ・バレルでーす☆」

「シン・アスカでーす☆」

「「よろしくおねがいしまーす☆」」

互いに精一杯テンションを上げて入室する。

正直恥ずかしい。でも、今後の円滑なコミュニケーションの為に、と自分自身を誤魔化す。

しかし、俺達の精一杯に返答はなかった。

小教室の中には誰もいなかった。俺達が一番乗りだったのだ。

「……」

気まずい。かなり気まずい。

嫌な沈黙が俺とレイの間に訪れる。

やってしまった。やらかしてしまった。

抑えていた羞恥心が数倍になって体中を駆け巡る。

身悶えしそうになっている俺を置いて、静かにレイは教室の電気
のスイッチを入れた。

そしてそのまま、無言で手近な椅子に座る。

流星はレイ。俺もそれにならって、レイの横に腰を下ろす。

「あの、さ… レイ…」

俺は持ってきた荷物の中身がレイにも見える様に、机の上に置いた。

「パーティー用のクラッカー… 買って来てただけど…」
インパクト狙いならこれだけでもよかったんじゃないかなあ…、
小さく呟いた。

途端、レイに思いっきり肩を掴まれて凄まれる。

「貴様… 何故、それを早く言わない…?」

レイの耳、真っ赤だよ。相当恥ずかしかったんだろうな。

それにしても顔が近い。美人が怒ると怖いな…

俺もしてたんだし、お互い様なはずなんだけど…

シュン、と扉が開く音が聞こえて来る。

「失礼しまーす!」

「理工科のヴィノ・デュプレでーす!」

「同じく理工科のヨウラン・ケントでーす!」

「よろしくお願いしまーす!!」

理工科の二人はどうやら、俺達と思考回路が似ていたらしい。

聞き覚えのあるフレーズに、理工科の二人とは仲良く出来そうだ。

視線を扉― 理工科の二人がいる方に向ける。

前髪が特徴的な男と色黒の男の二人組だった。共通しているのは、

二人とも何故か笑顔で固まっていることだろうか。

「失礼しましたー!」

つつつーと二人はそのままバックで教室から出て行く。

「へ? え、ちょっと! ここ、D207小教室だから! あって

ますよ! たぶん!」

慌てて俺は立ち上がり、二人を呼び止める。やっぱり、仏頂面と
無表情の組み合わせは他人を引かせてしまうのだろうか。

なんとか二人を連れ戻し、レイと二人で盛大に自爆した話を話す。
なかなか信じてもらえず、”チヨリース☆”をレイと二人でしたら

信じてやると言われた。

その後の出来事は俺達4人だけの秘密だ。

ヴィーノ曰く、怖い。ヨウラン曰く、視覚の暴力。だったらしい。やっぱり無表情だったのか、俺……

そんな経緯もあってか、俺達4人はすぐに仲良くなれた。

そして今、俺達4人は教室の入り口の両脇に分かれて待機している。

もうすぐ集合時間の11時になる。残るメンバーは2人。流石に遅刻はないだろう。

俺達各々の手の中にはクラッカー。糸を持ち、今か今かと待ちわびる。

そして、扉が――開く。

「――「ようこそ！ D207小教室へ！！」――」

軽快な破裂音。クラッカーの音が、色彩鮮やかな糸飾りと一緒に舞い踊る。

きっと驚いているだろう。

そう思って俺は――むんず、と腕を掴まれる。

「え？」

いきなりの展開に俺は対応できず、そのまま引き寄せられ、胸倉を掴まれ――投げ飛ばされる。

「お、お姉ちゃん！？」

その声をBGMに、咄嗟に受け身を取るものの、投げ飛ばされた方向が悪かった。教卓に思いつき背中を打ちつける。痛みが全身に広がる。

「あーら？ ごめんなさい？」

聞こえてきたのは、軽やかなソプラノの声。

「私ったらつい…でも、当然よね？」

全く悪いと思っていなのが言葉の端々からそれが伝わってくる。当然ってなんだ？投げ飛ばされることが？

クラッカーで驚かした事がそんなに気に障ったのだろうか？しかも、投げ飛ばされたのは俺だけ。なんて理不尽なんだ。痛みを抑えて見上げる。

鮮烈な紅髪。

堇色の瞳。

「軍人を目指す人間にあんなことするんだもの。いい度胸してんじやない」

どこか見覚えのある少女が、似た色彩の少女を背に、俺を見下ろしていた。

n e x t

?

?

「大丈夫か？ シン」

茫然とする俺と、憤慨する少女の間に入り、レイが俺に手を差し伸べる。

「あ、ああ」

その手を取って立ち上がる。

気の強そうな少女の瞳が俺を射抜く。

「随分な歓迎じゃない。流石は”紅眼の悪魔”さんって所かしら？
で？ 私の力量は、貴方のお眼鏡に叶いまして？」

なんだろう。悪意しか見えない。

それに、何か聞き捨てならないフレーズがあったような：

「”紅眼の悪魔”？」

思わず聞き返してしまう。

「え！？ 知らないの！？」

反応したのは、少女の後ろにいる髪を二つに結わえた少女だった。
俺が投げ飛ばされた時の反応からして恐らく、目の前にいる少女の妹だろう。

視線を妹の方に移せば、何故か小さな悲鳴をあげられて姉の背後に逃げられる。マユもあんな感じだったっけ。

「君は？」

自然と声が優しくなる。

「め、メイリン・ホークだけど…」

「メイリン」

何度か繰り返し、名前と顔を一致させる。

「俺はシン。シン・アスカ。よろしくな、メイリンさん」

笑顔を浮かべる。あ。隠れられた。どうやらまた失敗したらしい。
「ちょっと、私を無視しないでくれる？」

声をかけられ、我に返る。すっかり忘れていた。

「え？ あ、ああ… ごめん。クラッカーが気に障ったのなら謝る。
えっと…」

メイリンの名前からして、俺を投げ飛ばした少女の姓はホークだろう。

「ルナマリアよ。ルナマリア・ホーク。見ての通り、後ろのメイリンとは姉妹よ。ルナでいいわ。メイリンも、メイリンでいいわよね？」

「え？ あ、うん」

メイリンがメイリンで、ルナマリアが、ルナか。俺はその言葉に甘えることにした。

「その、ごめん。メイリン、ルナ。驚かせて」

悪乗りが過ぎた、と素直に謝る。

俺を睨んでいたルナマリアが、肩の力を抜き、溜め息をついた。

「はあ… こっちも悪かったわ。いきなり投げ飛ばして。それにしても、なんだか拍子抜けね」

ルナマリアの後ろから、メイリンも出て来る。

「おかしいなあ… 聞いてた話しと全然違う」

メイリンはしきりに首を傾げながら俺を見ている。

「話って—— あ。」紅眼の悪魔”か。えーと、何か知ってるか？
ヴィーノ、ヨウラン」

俺は後ろにいる二人に話しかける。

いきなりの展開に呆気取られていたらしい。俺の声で我に返っていた。

ヴィーノは勢いよく首を横に振った。

「いや、全然！！俺達理工科だから、航宙科の噂なんて余程の奴でない限り流れて来ないし！」

「そうか？ 俺は、航宙科に見た目も実力も恐ろしい奴がいるとは

聞いたことがあるが」

特徴までは流れて来ていない、そう言って、ヨウランは眉を寄せている。

俺はレイを見る。

「俺が他者の下らない噂話に耳を傾けるとでも？」

うん。期待する方が間違ってた。

「知らぬは本人ばかり、ってことかしら？」

”紅眼の悪魔” って呼ばれる理由に、本当に心当たりがないの？」

俺は頷く。

ルナマリアは深く溜め息を吐いて言った。

「なんて言えいいのかしら：」

「私が説明しようか？」

言いあぐねていたルナマリアに助け船を出したのはメイリンだった。

「えーっとね：」

メイリンの説明は簡潔でわかりやすかった。

どうやら、俺はかなり特異な目で見られていたらしい。

普段から無表情で近づき難いの、いつもレイと難しい会話ばかりしている。

重い紙製の教科書を持ち歩き、いつも読んでいる。

シミュレーターや射撃場、図書館に入り浸り、遅くまで訓練している。

頻繁に外出許可を貰ってはどこかに行っている。

モビルスーツの扱いに熟練しており、その戦い方には情けも容赦もない。

戦災によるオーブからの移民である。

これらに尾鰭がつくとどうなるか。

”レイはシン・アスカという悪魔に取りつかれた悲劇の美少年である”

” 重い紙製の教科書を持ち歩くのは、いつでもその本で他者を攻撃する為である”

” 訓練に勤しむのは、少しでも早く強大な力を手に入れる為である”

” 頻繁に外出するのは、外でイロイロと遊んでいるからである”

” 情け容赦ない戦い方は、自分の力を試しているからである”
結論。

” シン・アスカは、力に飢える血も涙もない悪魔である”

だから、人とぶつかった時に悲鳴をあげられて逃げられたのか。一部否定できない部分もあるが、それでも飛躍しすぎている。遠くを眺めながらそんなことを思う。

ふと横を見れば、レイがお腹を抱えて爆笑している。声も出さずに：これはツボに嵌まっているな。

腹が立ったので、思いつきその足を踏んでおいた。

「全部嘘だから」

俺は誤解を解くべく、説明を始めた。

無表情なのは病気で、レイとの難しい会話は単なる意地の張り合い。

教科書は地上育ちだから慣れている紙の方も買ったただけだし、訓練しているのは士官学生としての義務。

外出は正式に許可を得た学校幹旋のアルバイトの為だし、モバイルスーツの扱いが上手いのは工業用モバイルスーツの運用資格を取得しているから。

全て誤解なのである。

だから頼むから、” 紅眼の悪魔”なんて色々痛くて恥ずかしい呼び名はやめて欲しい。

一息に説明する。思わぬ風評を少しでも早く打ち消したかった。息を荒げる俺の肩に、ぽんと手が添えられる。

ヨウランが生ぬるい目で俺を見ていた。

「お前、色々苦勞してんだな…」

その後ろでは、ヴィーノがレイに続いて爆笑2号になっていた。くすくす聞こえてきた笑い声に正面を見れば、ホーク姉妹もおかしそうに笑っていた。

コミュニケーションには成功した様だけど、なんだか色々失った気がしてならない。

俺は深く溜め息を吐いた。

わやわやと色々話している内に、気づけば昼食の時間になっていた。

真っ先に空腹を訴えたのはレイだった。

俺にとっては意外でもなんでもなかったが、ルナマリア達―特にメイリンはとても驚いていた。

「そういえば、レイさ… レイ達はいつも中庭でお昼たべてるよね？」

メイリン： また、レイを”レイ様”って言いかけたな。

メイリン曰く、レイが持つ気品やら容姿やは、なんだか”様”をつけなければいけない気がするらしい。しかも、”レイ様”呼びはメイリンだけではなく、一部の女子に既に広まっているらしい。

初めて聞いた時は随分笑わせてもらった。

レイが”様”はつけなくていい、むしろつけて欲しくないという発言を受けて改めようとしているのだろう。

メイリンの問いにレイは頷く。

「オベントー」というものだ。全てシンが作っている」

「え！？ マジ！？」

ヴィーノ： 何故、そこで驚く。そんなに俺が料理するのは意外なのか？

「寮に向かつてるってことは、シンが料理をふるまってくれるってことかしら？」

「大したもののは出せないけどな…」

ルナマリアの言葉を、俺は一応肯定する。

「でも、よく食材が手に入るな」

個人で食材を買うのは大変だろうに、とヨウランが感心した様に言った。

「そこはまあ、外部アルバイトを許可されてる人間の特権と言うか… バイト帰りに、レイに教えてもらった店で買い物して帰るんだ」
選び方や調理方法はネットで調べている。

お店のおやっさんも親切で、色々教えてくれる。

「それじゃ、お手並み拝見させていただきましょうか？ シン？」
ルナマリアが猫の様に目を細めて笑った。

気付けば、寮の自室前。

恨むぞ、レイ…

＊

プラントはパンが主食なので、パンの種類は色々ある。

時間もそんなにないし、人数も多いので定番のサンドイッチを作る事にした。

レイに具になる野菜やハムを切るのは任せて、俺はサラダやスープに取り掛かる。

スープはコンソメにスライスした玉ねぎと小さく切ったベーコンを入れたものでいいだろう。

冷凍のタラを昨日買ったので、それをムニエルにする。

冷蔵庫から作りためておいたタルタルソースを取り出す。

しまった。皿が人数分ない。

「ごめん、みんな。皿がないからフライパンで出すけどいいか？」
そう声をかければ了承の声が返ってくる。

タルタルソースをタラのムニエルにかける。

「レイ、食パンを皿替わりにするからいくつか切らないで」

「わかった」

フオークは確か、使い捨ての奴があつたはず。

俺がごそごそ探している間に、レイはどんどんサンドイッチを生産していく。ツナの数が多いのはご愛敬だろう。

「シン、スペースが足りない。運んでおくぞ」

「頼む。ついでにムニエルも運んでおいて」

大きめのお盆にサランラップを敷き、即席の皿代わりにする。フライパンにはトングを添えておく。

レイが持つて行った先から歓声が聞こえて来る。

よくよく考えれば、スープ皿もない。

「プラスチックのコップでいいか」

俺は呟いて使い捨てのコップを取り出す。綺麗に洗って乾かせば、きつとあと何度か使えるだろう。

あと、飲み物は水かオレンジジュースでいいだろう。

冷蔵庫の中身はみるみる空になっていく。次に買いたいもののリストを作らないと、と考えながら、俺は作業に没頭した。

「なにこれ詐欺よ」

ムニエルを口にしたルナマリアが発した第一声だった。その隣ではメイリンが美味しいと顔を綻ばせている。良かった…

レイは黙々とサンドイッチを食べている。ヴィーノとヨウランも同様である。

「勉強も出来て、実践もできて、料理もできるって、こういう頭の中身してんのよ！」

どういふと問われても困る。

「まあ、いいじゃん。おかげで美味しい昼食が食べられてるんだし」
そう言つて、ヴィーノは朗らかに笑った。

「あ！　そうそう！　さっきの自己紹介は結構おざなりだったし、

改めて、自己紹介しようぜ。食べながら」

ヴィーノの提案にヨウランが頷く。

「それもそうだな。じゃあ、ヴィーノから」

「え！？ こういう時はヨウランからだろ！？」

そういう言葉の後には、俺から言おうってフリーズが付き物じゃないか！そんなヴィーノの主張を、ヨウランはあっさり退ける。

「言いだした奴からするのは当然だ。ほら、やったやった」

「へーい」

洩々とヴィーノは頷いた。少し考えると、ヴィーノは口を開いた。「んじゃ、改めまして。俺はヴィーノ・デュプレ。理工科で主に機体整備をしてる。機体のハード的なことで聞きたいことがあれば何でも聞いてくれよ！」

「たとえば？」

からかう様にヨウランが言った。

「んー… ほら、どんな動きができるかとか。関節がどこまで動けるか、とか。装備の事も俺担当だな。ほら、ヨウラン。バトンタッチ」

簡単に説明すると、ヴィーノはヨウランに話し手を譲った。

「ヨウラン・ケントだ。ヴィーノと同じく理工科で、主に機体をハードにした場合のソフトウェア OS 周辺を担当している。趣味はプログラミングだな」

「あ！ 俺の趣味言い忘れた！」

趣味を言ったヨウランに、ヴィーノが声を上げた。

「はいはい。次は――」

それを軽く流し、ヨウランはメイリンに視線を向けた。

「わ、私！？ えーと…」

話を振られて、メイリンは軽く慌てたみたいだった。

「メイリン・ホークです。情報科所属で、この班の中ではオペレーターの役割になります。趣味は―― おしゃべりやパソコンかな？ お姉ちゃんにパス！」

さっと自己紹介してメイリンはルナマリアに譲った。

それにしても、女の子はおしゃべりが好きな生き物なのだろうか。マユもおしゃべり好きだった。

「ルナマリア・ホークよ。見ての通り、隣のメイリンとは姉妹よ。私が姉。」

モビルスーツパイロット志望だから航宙科所属してるわ。なんとか顔を合わせたことがある人もいるんじゃないかしら？」

ルナマリアは俺の方を見てくる。

はて？顔を合わせた事があっただろうか…？

「趣味は裁縫よ。ほら、次」

ルナマリアの見かけによらない趣味に少し驚いた。

レイの次が俺の番だ。何を言うか考えておかないと…

「レイ・ザ・バレルだ。同じく航宙科所属。趣味は——強いて言うなら、ピアノとチェスだ」

レイが言い終わり、みんなが俺を見る。

「最後は俺だな。シン・アスカ。レイとルナと同じ航宙科所属だ。趣味は読書。面白い本があったら教えてくれ」

一気に言い終えると、ゆっくりと深呼吸をする。

見回せば、不思議な沈黙。首を傾げながらも、俺は言ってみた。

「乾杯でしょうか？今更だけど」

「お！ 賛成！」

ヴィーノは嬉しそうにコップにジュースを注いでいく。

俺はレイを見た。

「挨拶はしないからな」

ルナマリアやメイリンを見ても、首を振って拒否された。

やはり、俺がするのだろうか。

ヴィーノとヨウランを見れば、清々しい笑顔を浮かべてサムズアップしている。

溜め息をつき、俺はコップを掲げた。

「上手く言えないけど… 今日初めて顔を合わせて、あっという間

に仲良くなれて、正直、俺も驚いてる。

これから1年、この班で色々な演習に挑むことになると思う。けど、みんなと一緒に協力すれば乗り越えられると俺は確信してる。

今日の出会いに感謝を。

俺達のこれからが良いものであることを願って――

乾杯！」

「「「「「乾杯!!」」」」」

互いにコップをぶつけ合う。

プラスチックのコップで雰囲気はないけれど、俺の心には確かに触れ合う硝子の音が響いていた。

n
e
x
t

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6317x/>

Memento mori - 或は死者の為のミサ

2011年12月29日02時48分発行